

41628

教科書文庫

4
810
41-1926
2000301568

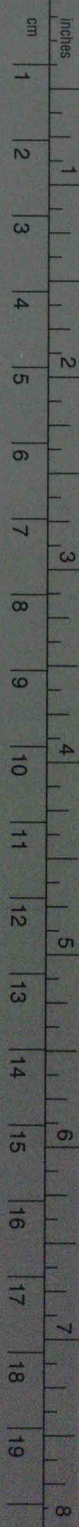
717
1926

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

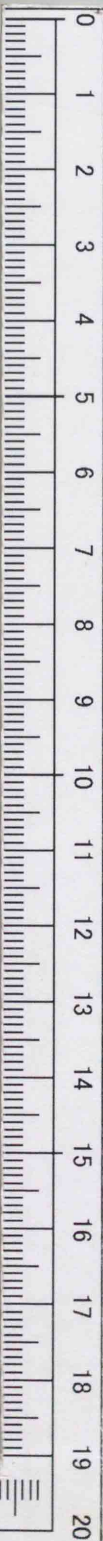
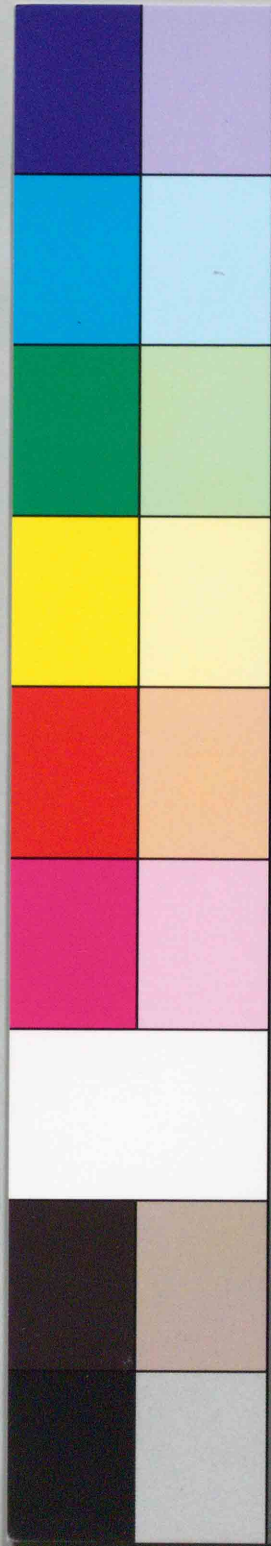
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Oc8
資料室



中等國語讀本
新修版
卷五



資料室

395.1
008

日七十月二年五十大

濟定檢省部文

用科語國校學中

中等國語讀本
落合直文編
金子元臣補

社會式株
院書治明



目次

一 御製と教育……………	芳賀矢一……………	一
二 わが世をまもれ(和歌)……………	……………	七
三 そぞろ言……………	(徒然草)……………	一〇
一、雪の朝……………	……………	一〇
二、青き眼……………	……………	一一
三、賤しげなる物……………	……………	一二
四、見ぬ世の友……………	……………	一三
五、二つの矢……………	……………	一三
四 忠度と俊成……………	(平家物語)……………	一四
五 新緑……………	池邊義象……………	一九

目次

六 修善寺だより……………尾崎紅葉……………四
 七 淡路島俳句………………………………………五
 八 木蓮薫る溪谷……………菊池幽芳……………三
 九 笠置山……………(太平記)……………三七
 一〇 准后親房………………………………………四
 一一 藝苑逸話………………………………………四
 一、繪佛師良秀……………(寸訓抄)……………五
 二、鳥羽僧正……………(古今著聞集)……………五
 一二 遠キ慮格言………………………………………五七
 一三 蓄音機……………吉村冬彦……………五九
 一四 心の耳……………北原白秋……………五九
 一五 郵便はがき……………徳富蘇峰……………七一

一六 曼珠沙華和歌………………………………………七
 一七 鹽原……………尾崎紅葉……………八〇
 一八 苦行者と蛙……………佐藤春夫……………八七
 一九 花の譜……………幸田露伴……………一〇一
 一、梅………………………………………一〇一
 二、雪團………………………………………一〇二
 三、芙蓉………………………………………一〇三
 四、朴………………………………………一〇五
 五、瞿麥………………………………………一〇六
 二〇 睡蓮……………五十嵐力……………一〇六
 二一 向上……………山路愛山……………一二三
 二二 米國民……………津田敬武……………一二七

二三	嵐の岬……………	吉江孤雁……………	一三
二四	椰子の實(新體詩)……………	島崎藤村……………	一三
二五	扇の的……………	(平家物語)……………	一四
二六	鷺江の月明……………	佐藤春夫……………	一四〇
二七	長江湖航……………	徳富蘇峰……………	一四七
二八	空ゆく雁……………	(曾我物語)……………	一五五
二九	路傍に寝てゐる青年(戯曲)……………	坪内逍遙……………	一六三

(終)

現代文學一覽

附 録



中等國語讀本

新修一版 卷五

一 御製と教育

明治天皇の御製が九萬首以上もおありなさるといふことは、あらゆる點に於いて、東西古今の君主を凌駕し給ふ御盛徳の一つとして、驚歎し奉るより外は無い。わが大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも亦一つの神業である。文學史上から見ても、最多作の歌人といはれた家隆卿さへ、天皇に比べ奉れば物の數でも無い。歴代の勅撰二十一代

家隆卿
歌人。藤原氏。
藤原俊成の門人。一生の創作二萬餘首。
(一八〇八年—一八八七年)
二十一代集
古今、後撰、拾

遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新載撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今。

集の歌の数が總計三萬數千であるが、御製はその三倍といふに至つては、實に驚くべき數といはねばならぬ。この多數の御製が、最も多事な明治の御治世に、萬機親裁の餘に成つたことを考へ奉れば、その御精力の絶倫であらせられたこと、いつの世、何處の國にも類例が無い。皇威を四海に輝し、皇國を世界第一等國の班にお進め遊ばした大業と共に、古來の言の葉の道に於いても、空前の偉績をお示しになつたことは、億兆の欽仰し奉る所、千代萬代にかけての語草である。御精力の絶倫におはした事はいふまでも無いが、かばかり多數の御製のあらせられたのは、平素何等の娛樂をも近づけ給はず、酷暑、嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出がなく、

常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが即ち和歌であつたからである。これを思へば、實に恐多いことであつて、且又その神神しい御性格を覗ひ奉ることが出来る。御製を拜誦し奉るものは、一言一句これが即ち萬機親裁の餘、御



筆宸皇天治明

くつろぎ遊ばされた御日常の御慰安であつたといふことを拜察しなければならぬ。

そしてその數數の御製が、風調は高く規模は大きく、如何にも萬世一系の帝祚を踐ませられる上御一人の御作とす

かがはれる。國を思ひ民をあはれませ給ふ大御心は、常に御製の上にあらはれて居る。

一首の御製が米國大統領ルーズヴェルト氏を動して、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の短歌が千萬の兵馬にもすぐれた力を示すもので、和歌始つて以來未曾有の事に相違ない。まして六千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に於いては、何の經典もこれに並ぶべきものは無い。日日の御慰が直に國民教化の源泉となる。これ程の貴さが何時の世、何處の國にあらうか。

明治時代の詔敕はいづれも森嚴雄大、永く國史を照して

一首の御製
明治三十七八年
年戦役の際に
詠ませ給へる
「四方の海み
なほらからと
思ふ世になど
波風の立ちさ
わぐらむ」の
御製かきす。
ルーズヴェル
ト
Roosevelt
北米合衆國
二十六代の
大統領。西
曆一八五八
年—一九一
九年

後世の國民に聖代を語り、典範を示すものである。しかし詔敕にはそれぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直に大御心の發したもので、これを拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日日玉の御聲を拜聽する光榮を有するのには、實に我が國民の特殊な幸福であるのである。

世には、日本文學に莊重な典籍の無いのを訴へる人があ
る。金音美辭、多くこれを支那の古典に仰いで、文章にも教訓
にも、古代支那の言句を引證して始めて安心して居る人が
ある。これ等の人の思想の淺はかなことは今更いふまでも
ないが、かくの如き人人にも、直に合點の行くのは即ち先帝

の御製である。これが句句金玉の響を有して、いはゆる古聖賢の語にも優ることは、何人も首肯するところである。遠く外國たる支那の聖賢に依るまでもなく、近く我が大天皇は、すべての教訓、名言を宣はせられてゐる。今より後の我が日本國が、憲法、皇室典範をはじめ、すべての模範を明治時代に求めるやうに、教化の淵源としても大天皇の御製を奉戴して、かの教育敕語とともに永久にあげ奉るといふことは、如何なる國民も、否、外國の人人も、必ずしかあるべき事と贊成するに相違ないと思ふ。彼のルーズヴェルト氏の如きも、第一の贊成者たるに相違ないと思ふ。我等は今日まで、明治の御代に生まれて玉音を耳にしたる幸福をおもふと同時に

に、今後幾千萬年も、大天皇がその御製を以て國民を教化し給ふ御遺徳の盛なことを思ひやると、實にその畏さに涙がこぼれる。文學上より見ても大天皇の御事業は偉大であるが、文學上の價值よりも御製の各首が、教育上より見て萬世不朽の經典であることを思ひ奉らねばならぬ。大隈侯の國民讀本は、既にこれを以て編成の根本とした。今日の國定讀本にも幾首かの御製を掲げてある。大正以後の教育は、孔子や孟子の言よりも、まづ明治天皇の大御心を以て國民を教化しなければならぬと思ふ。(芳賀矢一筆のまにまに)

二 わが世をまもれ (明治天皇御製)

大隈侯 名は重信。明治の功臣にして大政治家。大正十一年一月薨す。(二月九日—二月二十八日)

孟子 名は軻。支那の大賢人。西曆前三六五年—前二八五年)

芳賀矢一 國文學者。文學博士。福井縣の人。慶應三年生まる。國學院大學學長。東京帝國大學名譽教授。

わが世なまもれ
わが世なまもれ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

うたにぞあ
りける

なご一さわぐ
らむ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

わが世なまもれ
わが世なまもれ

雪のおもしろう降りたりしあした人のがりいふべき事

雪のおもしろう降りたりしあした人のがりいふべき事

三 そぞろ言

一、雪の朝

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべき事

いひたりしこ
そをかしか
りしか

ありて文を遣るとて、雪のこと何ともいはずりし返事に「こ
の雪いかが見る」と、一筆宣はせぬ程のひがひがしからむ人
の仰せらるる事、聞き入るべきかは、返す返すくちをしき御
心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今はなき人なれ
ば、かばかりの事も忘れがたし。(徒然草)

二、青き眼

さしたる事なくて、人のがり往くは善からぬ事なり。用あ
りて往きたりとも、その事果てなばとく歸るべし。久しく居
たるいとむづかし。人と對ひたれば詞も多く身もくたびれ、
心も静ならず、よろづの事障りて時を移す。互のため益なし。
厭しげにいはむもわるし。心づきなき事あらむ折は、なかな

阮籍が青き眼
晉書に、阮籍
が事をいひ
て、不_レ拘_レ禮
教、能_レ爲_二青白
眼_一對_レ人。

かその由をいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の
つれづれにて、今しばし、今日は心靜に、などいはむはこの限
にはあらざるべし。阮籍が青き眼誰もあるべき事なり。その
事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬるいとよ
し。又文も、久しく聞えさせねば、などばかりいひおこせたる、
いと嬉し。(徒然草)

三、賤しげなる物

賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多
き、持佛堂に佛の多き、前栽に石草木の多き、家の内に子孫の
多き、人にあひて詞の多き、願文に作善多く書き載せたる。多
くて見苦しからぬは文車の文、塵塚の塵。(徒然草)

四、見ぬ世の友

ひとり燈火の下に文をひろげ
て、見ぬ世の人を友とするこそ、こ
よなう慰むわざなれ。文は文選の
あはれなる卷卷、白氏文集、老子の
ことば、南華の篇。この國の博士ど
もの書けるものも、いにしへのは
あはれなる事多かり。(徒然草)

五、二つの矢

ある人、弓射ることを習ふに、諸
矢をたばさみて的に向ふ。師の曰



(松榮筆) 賢七の竹林

佛敎
道敎
老子

文選 六十卷。梁の昭明太子の編。周以來の詩文集なり。
白氏文集 七十五卷。唐の白居易の詩文集なり。
老子のことば 老子二卷。周の李耳の著。その大道上徳を説くこと五千言。
南華の篇 莊子のことば。八卷。周の莊子の著。唐の代、莊子を尊びて、南華真人と稱せしむり、一に南華真經といへり。

はく、初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を頼みて、はじめの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。僅に二つの矢、師の前にて一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事に互るべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねてねむごるに修せむことを期す。況や一刹那のうちに於いて懈怠の心あることを知らむや。何ぞ只今の一念において直にすることの甚だ難き。(徒然草)

四 忠度と俊成

忠度 平清盛の弟。壽永三年二月一の谷にて戦死す。(一八〇二年—一八四三年) 五條三位俊成 歌人。藤原氏。正三位にして五條に住みし故にいふ。(一七七四年—一八六四年)

薩摩守忠度は何處よりか歸られたりけむ。侍五騎、童一人、わが身ともに、ひた兜七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開けず。忠度と名告り給へば、落人還り來れり」とてその内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、みづから高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が参りて候ふ。假令門をば開けられずとも、この際まで立ち寄り給へ」と申されたりければ、俊成卿「その人ならば苦しかるまじ。開けて入れ申せ」とて、門を開けて對面ありけり。事の體、何となく物あはれなり。薩摩守申されけるは、「先年申し承りてより後は、ゆめゆめ疎略を存せずとは申しながら、この二三箇年は京都の騒國

國の亂出て來、剩へ當家の身の上に罷り成りて候へば、常に
參り寄ること候はず。君既に帝都を出てさせ給ひぬ。一門
の運命、今日はや盡きはて候ふ。それに就き候うては、撰集の

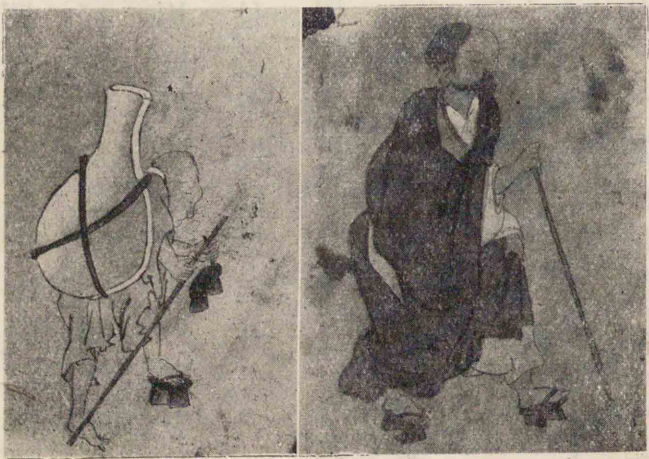
述懐
夕のうらみはなほ
井のうらみはなほ
あはれはなほ
あはれはなほ
あはれはなほ

筆成俊原藤

御沙汰あるべき由承りて候ひし程に、生涯の面目に、一首な
りとも御恩を蒙らむと存じ候ひつるに、かかる世の亂出て
來て、その沙汰なく候ふ條、ただ一身の歎と存じ候ふ。この後、
世靜つて撰集の御沙汰候はば、これに候ふ卷物の中に、さり

御守とこそ
候はむすれ

ぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の蔭にても
嬉しと存じ候はば、遠き御守とこ
そなり參らせ候はむすれとて、日
來詠み置かれたる歌どもの中に、
秀歌と覺しきを百餘首書き集め
られたりける卷物を、今はとて打
ち立たれける時取りて持たれけ
るを、鎧の引合より取り出でて俊
成卿に奉らる。
三位これを開きて見給ひて、か
かる忘形見どもを賜り候ふ上は、ゆめゆめ疎略を存ずまじ



師法琴琵琶

さしてご一歩
ませ給ふ

前途程遠云云
大江朝綱が渤海の使に贈りしものにて、次句は、「後會期逢、露二櫻於鴻臚之曉涙」。

う候ふ。さても唯今の御わたりこそ、情も深う哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へ」と宣へば、薩摩守、骸を山野に曝さば曝せ、憂き名を西海の波に流さば流せ。今はうき世に思ひ置くことなし。さらば暇申すとて馬に打ち乗り、兜の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位、後を遙に見送りて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、「前途程遠、馳思於雁山之夕、雲」と、高らかに口吟み給へば、俊成卿もいとど哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世静りて千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひ置きし言の葉、今更思ひ出でて哀なりければ、件の卷物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身救

一首をぞ一入
れられたる

志賀の都
滋賀縣滋賀郡
にありし天智
天皇の大津
宮。
ながらの山
滋賀縣滋賀
郡。

勘の人なれば、名字をば現されず、故郷花といふ題にて詠まれたる歌一首をぞ、よみ人知らずとて入れられたる。

さざなみや志賀の都はあれにしを

昔ながらの山ざくらかな。

その身朝敵となりぬる上は仔細に及ばずといひながら、恨しかりける事どもなり。(平家物語)

五 新 緑

白樺の若葉の露を帯びたるに、月のさしたるはいふべくもあらず。檜、柏などの茂り合ひたるが、風に吹かれてその葉の靡き合ひたるは、葛の葉の秋さへ思ひやられてをかし。楓

心ちぞしする

の青青とはえたる、まして庭などに植ゑられたるが赤き芽を勻はせたるは、愛嬌こぼるる少女を見る心ちぞする。藤の葉の長う伸びて棚をおほへるは、花の春のゆかりも思ひおこされ、櫻の若葉の柔なるには、眠れる蝶の夢さへおしはからる。

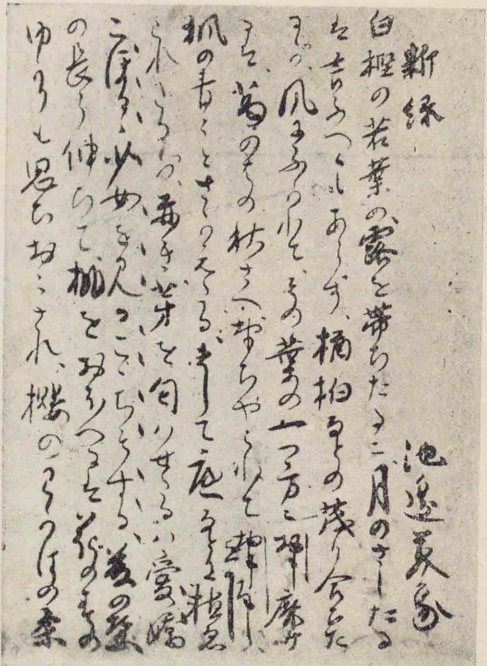
賀茂の祭
京都府賀茂神社の祭。四月の中の西の日に行ふ。

榎、楠、鴨脚樹などの高く大きなるが茂り合ひたるは、殊に人の心を清うするものなるが、賀茂の祭のこの下蔭に行はるるは、神神しさも花やかさも添ひて、初夏の氣色はここに盡きぬべくぞ思はるる。さるは花傘、菅傘、鈴懸の馬、舞人、陪從などの列を正してゆくもいにしへ偲ばるるに、檢非違使の殊に闕腋の袍を著、老懸を疊紙に包みて懐に入れゆくなど、

なるぞ嬉しき

この御祭にのみ行はれし故實も、そのままなるぞ嬉しき。草木の緑つややかにして、御手洗の水も青むばかりなる

東遊
上古の舞曲の名。又東舞、駿河舞ともいふ。



池邊夏家筆

に、東遊の樂さやかに響きて、舞人の袖の映れる、いかで心もすまざらん。敕使の尊げに宣命よむ聲に、廣前の御帳の風に動ける、かしこ

さも添ひぬかし。馬場にては、草の筵を踏み散す走馬のめざましきがあり。樗の花の、青きが中にひとり紫色したるもゆ

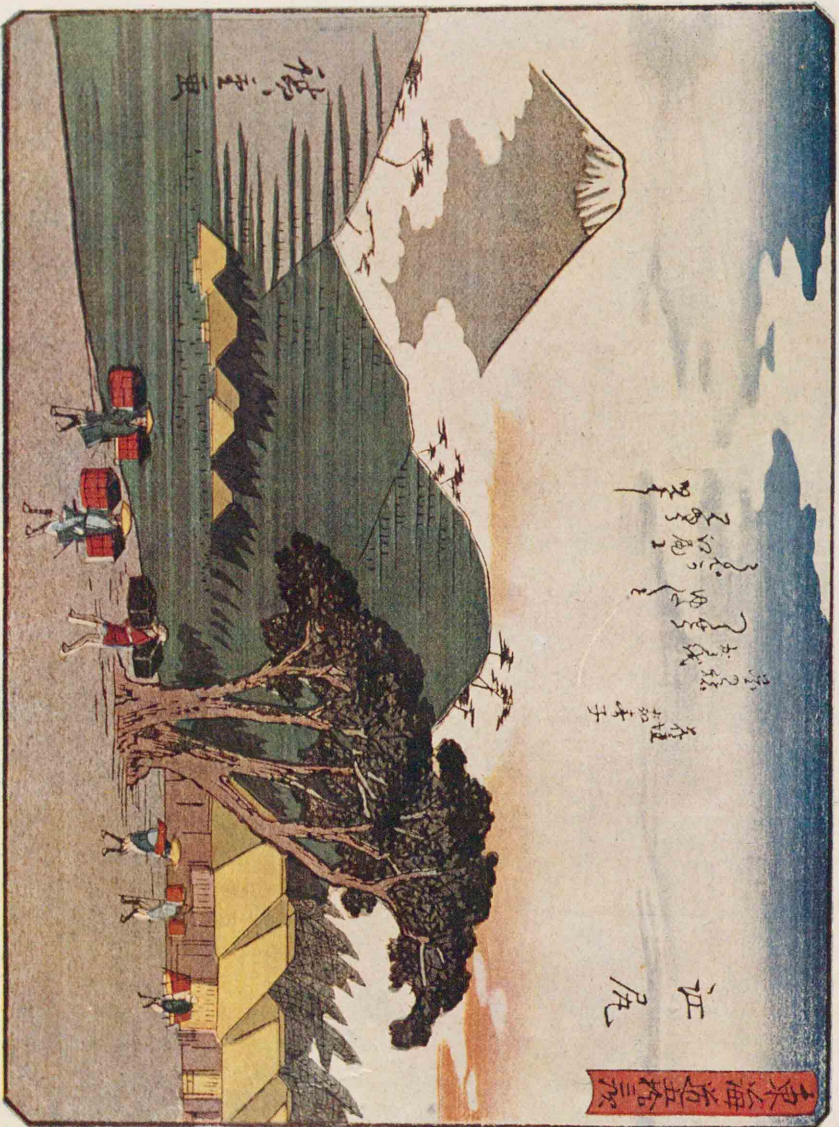
かし。物賣る女どもいと多きが中に、大原女の赤き褌かけた
るぞことに目立つめる。堤の松も今日はことに色そひ、卵の
花の川に臨めるが、布引きたるやうなるもすがすがし。

さても、かくみやびかなる眺は西の京にまされるところ
あらざめれど、東海道線第一の景色をなせる富士の根の初
夏の眺ぞ、また飽くことなき極にはありける。一日、岩淵驛な
る某の莊をおとなひけることありしに、その庭より打ち仰
きたる嶺の雲の清くさやかなるはいふも更にて、裾野のお
しなべて青緑に續きたる、かばかりの景色はいづくにか求
め得らるべきとぞ思ひし。愛鷹山、鷺津山などもこの緑の中
の一塊となりて、はては大海の青きに聯りたるに、遙なる真

岩淵驛
静岡縣庵原
郡。

とぞ思ひし

愛鷹山、鷺津
山
富士の南麓に
ある山。



東海道線第一 (岩淵驛) 中

帆片帆の白きと高根の雪との外は、天地悉く青筵を敷きたるやうなり。青色は昔より春の色といひ傳へたれども、まこととは初夏のもてくる色なりけり。

薄の葉、麥の穂、柊の枝さへ、この頃までは手を切るとも見えず。八手の葉のなよやかなるを取り來りて頬におしあつれば、ひやひやと心ちよく、扇骨木の若葉つまみ取り口にくはふれば、そのさはり柔に、甘き汁さへ出てぬるいとなつかし。桑の葉の蠶にくはるるもこの頃のことにして、茶の芽の争ひ摘まるるも昨日今日のことぞかし。

「立つことやすき花の蔭か」と、古人の歎きけんもさるることながら、この柔なる青葉に月影日影のさし添ひたる、いか

立つことやす
き花の蔭かは
古今集春下に
出てたる、凡

河内射恒の歌にて、その上句は「げふのみと春をおもはぬ時だにもしなり。」

池邊義象 國文學者。藤園と號す。熊本の人。宮内省御歌所寄人。大正十二年歿す。(二五一年—二五八三年)

頼家公 頼朝の子。北條時政のために、修禪寺に幽殺せらる。(一八四一年—一八六三年)

尼將軍 源頼朝の宰平政子。(一八七年—一八八五年)

蒲冠者 源範頼。兄頼朝の忌諱に觸れ、建久四年修禪寺に幽殺せらる。(一八五三年)

修禪寺 僧空海の開基。後改宗して禪宗となる。

て花の春に劣るべき。まして時鳥一聲雲を破れば、緑の色も一しほ加り、こぼるる露も青む心ちするをや。

ほととぎす青葉もりくる一聲に

花にねし夜の夢はさめてき。

(池邊義象)

六 修善寺だより

拜啓、昨日は雨の日ぐらし無聊に困み、夕景始めて傘さして、川向の小山なる頼家公の墓を拜し申し候。見るともいたはしき荒涼たる藪蔭に、空しく一片の殘石を留めて慘禍を生前に極め、恥辱を末代に曝され候こと、一

たび征夷大將軍の顯職にも居給ひつる御運を以てして、如何なる前世の御宿業にかましましけん、と、低回去るに忍びかね候。

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。これこそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は後人の御墳無きを慨きて、假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢は、最も懷古の暗涙を催さしめ候。蒲冠者の墳はいまだ弔はず、すぐ鄰に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申し上ぐべく候。

この日は一日閉居の餘、入浴七度に及び、剩へ連夜の按

獨鈷の湯
修善寺の中央
を流るる桂川
の中に涌出
す。

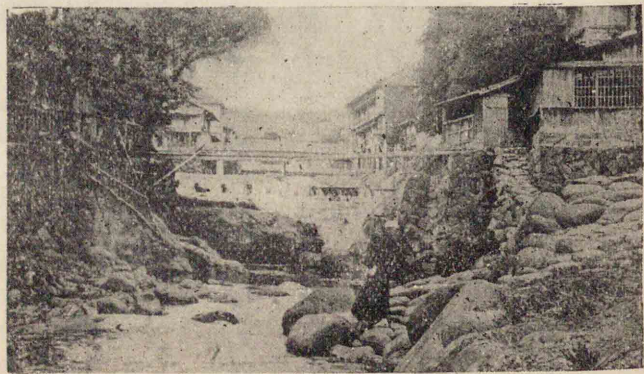
摩に全身綿の如く相成り、疲労度に過ぎて徹夜眠る能はず、黎明始めて交睫して、覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣、玲瓏玉の如くなるに踊躍して、獨鈷の湯の撮



尾崎紅葉

影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへし折り、尠からず當惑致し候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀬に踏み入り、ピントをあはせ候が、ひまどり候程に、水中の赤脚寒に堪へず、しかも來浴者頻頻として、目障の邊に著物を脱ぎはなしなど致し、始終ピント安を妨害致され、技師の難澁これに過ぎず候ひき。

辛うじて一照致し候へども、印畫の安否甚だ心元無く存じ候。それより川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に機械を立て候處、崖下の馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢道を讓るべく餘儀無くせらるるため、倥偬の間に速寫機を拈りて立ち退き申し候。



修善寺

この寫眞修行の前、人の需に依りて少少麤筆を揮ひ申し候。然るに、僻境の惡箋用ゐるべからずなど不足を申

得候こそ一致し候へ

新杵
横濱の菓子
舖。
尾崎紅葉
小説家。名は
徳太郎。東京
の人。紅葉全
集六巻を遺せ
り。明治三十
七年歿す。(二
五二七年—二
五六四年)

し候處、亭主才覺して紙門かみかどに貼りのこしの地紙を裁ちて持ち來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短冊を得候こそ風流この上なく感心致し候へ。
二日の雨にて椎茸出來候へば、味醂醬油の附焼に致し候。今は春子のすがれにて、肉薄く氣も亦微には候へども、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆、草餅を貰ひ、夜に入りて某氏より新杵しんきの一折を贈られ候。胃病の人、毎に餓鬼の如く候。幸に食談の煩を咎め給ふことなかれ。草草不盡。(尾崎紅葉—紅葉書簡)

七 淡路島

井上士朗

井上士朗
名古屋の人。
俳人。加藤曉
臺の門。文化
九年歿す。(二
四〇〇年—二
四七二年)

月高くかりがねひくし淡路島
露に音あり誰住みなれて茶の煙

秋
秋の明
月
ねりあ
士朗

筆朗士上井

鈴木道彦

鈴木道彦
俳人。仙臺の
人。加舎白雄
の門。文政元
年歿す。(二四
一四年—二四
七八年)
夏目成美
俳人。江戸の
人。文化十三
年歿す。(二四
〇七年—二四
七六年)

ゆさゆさと櫻もて來る月夜かな

夏目成美

東海道のこらず梅となりにけり

建部巢兆
俳人にして畫
を善くす。武
藏の人。文化
十年歿す。(一
二四七三年)

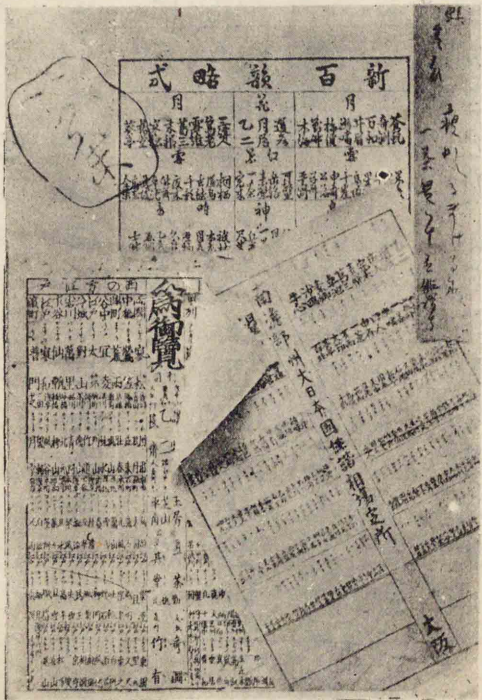
○ 菜の花に染めても見たし富士の山

建部巢兆

川村碩布
俳人。武藏の
人。白雄の門。
文政十四年歿
す。(二四〇一
年—二四九一
年)

○ 土藏賣れて日あたりのよき牡丹哉

川村碩布



俳人 附

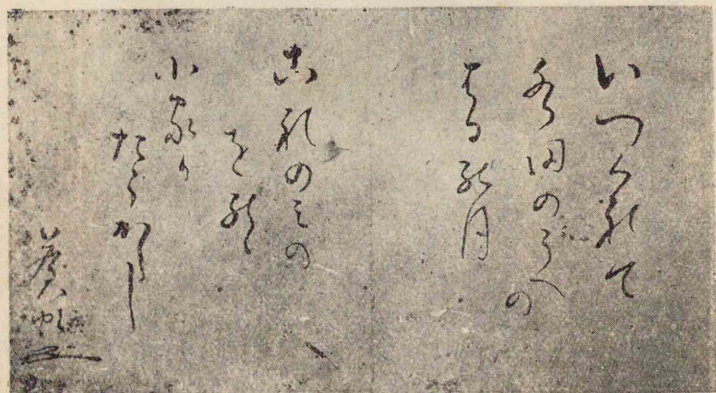
小林一茶
信州柏原の
人。通稱彌太
郎。俳諧寺と
號す。滑稽酒
脱獨自の風を
立つ。文政十
年歿す。(二四
二三年—二四
八七年)

○ 小林一茶

のどかさや淺間のけむり晝
の月
瘦蛙負けるな一茶これにあ
り
露ちるやおのおのあすは御
用心
名月や江戸のやつらが何知
つて

○ 成田蒼虬

櫻もちて人はかへるに旅のそら



成田蒼虬筆

成田蒼虬
俳人。加賀の
人。關更の門。
天保十三年
歿す。(二四二
〇年—二五〇
二年)

すずしさや牛も根笹に繋がれて

○

田川鳳朗

鶯にふまれて浮くや竹柄杓

○

櫻井梅室

名月や草木にをどる人のかげ

○

兒島大梅

鰻食はぬ人にはいはじ鰻の味

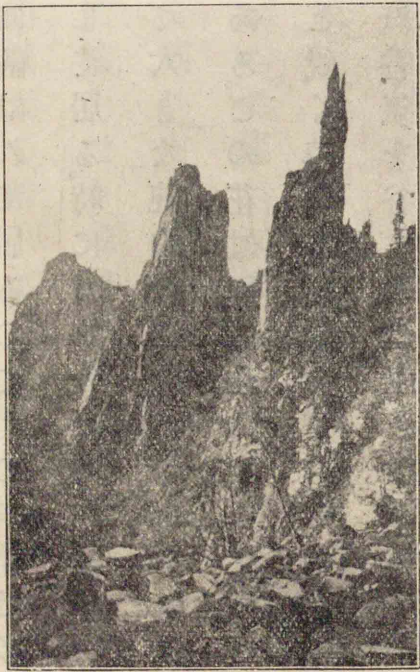
八 木蓮薫る溪谷

私は内金剛の代表的溪谷として、萬瀑洞を推すに躊躇せぬが、密林に蔽はれた最も幽邃な溪谷としては、まづ靈源洞

田川鳳朗
俳人。道彦の門。天保二年歿す。(二四〇八年—二四九年)
櫻井梅室
俳人。金澤の人。蘭史の門。嘉永五年歿す。(二四二年—二五二年)
兒島大梅
江戸の人。俳諧漢詩を善くす。天保十二年歿す。(二四三二年—二五〇一年)
内金剛
朝鮮江原道金剛山。

を擧げねばならない。別して、靈源庵への岐路から望軍臺の下、水簾洞の邊に達する二三十町間の峽谷は、眞に幽邃の極致である。私はこの峽谷を、別に水簾洞峽谷と名づけたい。

この峽谷には、絶頂より轉落した二丈三丈の大きさを有する角の磨滅した巨岩が、累累として横たはり、これを受けて居る地盤も、流水の磨削作用によつて鏡のごとく研ぎ出された花崗岩で、急湍は障礙物のない限、その上を音もなく滑り、轉石



山剛金鮮朝

に遮られては、或は激し、或はその下を潛り、飛瀑ともなり深潭ともなつて、千百の水の美觀を構成する。しかもその上は常に鬱蒼とした老樹に蔽はれて居るので、その幽邃は多分に神祕の色彩を加味して居る。時にはまた陰濕の溪間を好む山木蓮が、水に臨んで大きな純白な花をつけ、谷中その香に満ちて居ることがある。この花は一輪手に取つて嗅げば、強烈な香に堪へぬほど鋭く嗅覺を刺激するが、それが梢に咲いて居ると、えならぬ香氣を谷に漂はせるのだ。幽逕に人なく、獨、水聲禽語を聞く時、いづこともなく薰り來るこの木蓮の妙なる香氣が、この谷に與へる靜寂の感じは、その境に臨まぬ者の容易に想像し得ぬところであらう。

私達は溪流を離れては密林に入り、密林からまた溪流を横ぎりつつ進む。樹木はおもに樅、檜、朝鮮松、杜松、楓樹等に會ふのであるが、斧斤の嘗て入らぬ森林で、下草には躑躅や大きな羊齒があり、多くは朽木枯葉でうもれた中に、纔に山僧の通ふ細逕が覺束なくも通じて居る。往往、日の目を漏さぬところがあつて、太い葛蘿が大蛇のやうに垂れ、何百年かを經た老木が自然に倒れ、古いものは形を留めぬまで腐朽し、新しいものは谷に横たはり、或は行手の道を塞いで居るなど、さながら原始的風光で、踏んで行く枯葉の音にも自然の私語を聞く心地がする。

この邊にはまた縞栗鼠が多く、不意の侵入者に驚きなが

ら半身を起して、木の枝、岩角からちつと私等をまもつて居る。栗鼠は外金剛でも見たが、樹木の多いだけにこの谷が一番多いらしい。栗鼠の外の動物はあまり見當らない。杜鵑は時時谷を掠めて鳴き過ぎ、山鳩の遠音が處處で聞かれた。

水簾洞まではよほどの上りて、そこに行くには可なりの難所を越えねばならぬ。然しそこまで行き著くと、誰も思はず行手に展開する美觀に見とれずには居られない。そこには二百尺程の長さに、約四十度の傾斜面をなして居る白色を帯びた光澤のある花崗岩が、溪一杯の一枚岩となつて、その上を浅い水晶のやうな水が、四五尺の幅に波頭のやうな紋様を順次に畫きながら、音もなく押し擴りつつ滑つて居

るので、水簾の名が如何にもふさはしく、さながら造化の手が、永遠に小歇もなくそれを繰り出して居るやうに見える。この水は、窟のやうに突き出て居る大きな岩の下に流れ込むので、上部の落口には徑三尺、深さ六尺ほどの規則正しい壺の形をした自然の穴が穿たれ、一度そこに落ちこんだ水が渦巻きつつ流れ出て居るのも一奇觀で、殊に楓の枝が面白くその上にさしかかつて居るなど、上から見ても下から見ても、如何にもいい構圖が出来て、この瀧に繪のやうな感じを與へる。(菊池幽芳「朝鮮金剛山探勝記」)

九 笠置山

菊池幽芳
小説家。名は清。明治三年水戸に生まる。大阪毎日新聞社員。
笠置
京都府相樂郡にあり。

類火云云
この事、元弘
元年九月二十
八日なり。

藤房
藤原宣房の
子。官中納言
に至る。建武
中興の後遁世
す。(一九五
年)

季房
藤房の弟。北
條氏の爲に下
野に流され、
配所に死す。
(一九九三
年)



後 醍 醐 天 皇

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかかりけれ
ば、主上を始めまゐらせて、宮宮、卿相、雲客、皆歩跳なる體にて、
いづくをさすともなく、足
にまかせて落ち行き給ふ。
この人人、はじめ一二町が
程、こそ主上を扶けまゐら
せて、前後に御供をも申さ
れたりけれ、雨風烈しく道
闊くして、敵の関の聲ここ
かしこに聞えければ、次第に別れ別れになりて、後にはただ
藤房、季房二人より外は、主上の御手を援きまゐらする人も

十善
不殺生、不偷
盜、不邪淫、不
妄語、不惡口、
不兩舌、不綺
語、不懷食、不
瞋恚、不邪見。
赤阪
大阪府南河内
郡。

多賀の郷
京都府綾喜
郡。

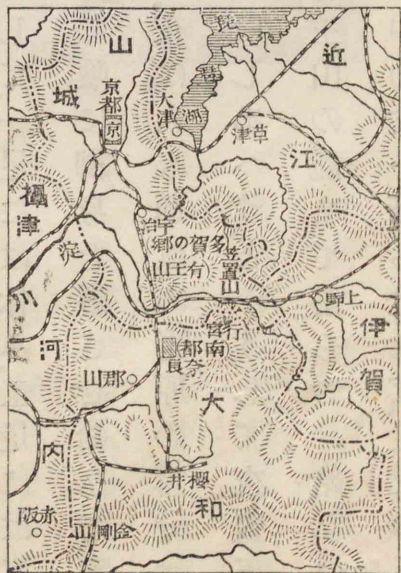
なし。忝くも十善の天子、玉體を田夫、野人の形に變へさせ給
ひて、そこも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあ
さましけれ。いかにもして夜の内に赤阪の城へと、御心ばか
りを盡されけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行な
れば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち
止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草
の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷
はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三口
に、山城の多賀の郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。
藤房、季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身
疲れて、今はいかなる目に遭ふとも、逃げぬべき心地せざり

ければ、せむ方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟諸共にう
 つつの夢に臥し給ふ。梢
 を拂ふ松の風を雨の降
 るかと聞し召して、樹蔭
 に立ち寄せ給ひたれ
 ば、下露のほらはらと御
 袖にかかりけるを、主上
 御覽せられて、

さしてゆく笠置の山を出てしより

あめが下にはかくれがもなし。

藤房卿涙をおさへて、



いかにせむ憑む蔭とて立ちよれば

なほ袖ぬらすまつのしたつゆ。

是海校之情乃
 法流休後
 照言お絶華了
 元弘三年月嘗
 宗峯園仲禮家

後醍醐天皇宸筆

山城の國の住人深須
 入道、松井藏人二人はこ
 の邊の案内者なりけれ
 ば、山山峯峯残る所なく
 搜しける間、皇居隱なく
 尋ねいだされさせ給ふ。
 主上誠に怖しげなる御

氣色にて、汝等、心あるものならば、天恩を戴きて私の榮華を
 期せよと仰せられければ、さしもの深須入道俄に心がはり

もだしけるこ
れ
そ—うたてけ

内山

山邊郡朝和村
大字柚之内を
いふ。

殷湯

殷の湯王をい
ふ。

越王

句踐をいふ。

六波羅の北方

鎌倉時代、京
都の六波羅の
南北に探題を
置きて、京畿
以西の政務兵
馬を管掌せし
めたりき。

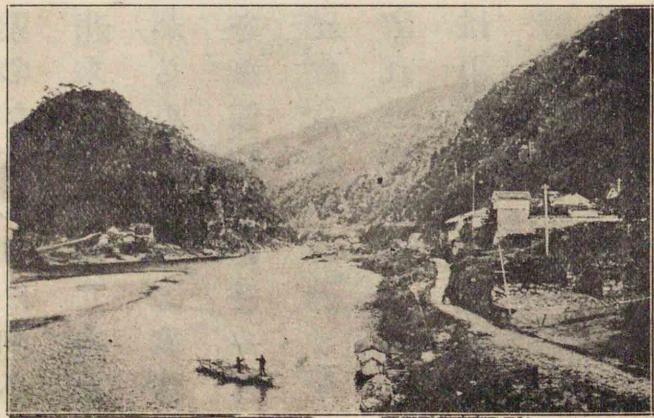
して、あはれ、この君を隠し奉りて義兵を挙げばや」と思ひけ
れども、後に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ
易くして道の成り難からむことを憚りて、もだしけるこそ
うたてけれ。俄の事にて綱代の輿だになかりければ、張輿の
怪しげなるに扶け乗せ参らせて、まづ南都の内山に入れ奉
る。その體、ただ殷湯夏臺にとらはれ、越王會稽に降ぜし昔の
夢に異ならず。これを聞きこれを見る人毎に、袖を沾さずと
いふことなかりけり。

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路
を警固仕りて、主上を宇治の平等院に成し奉る。翌日に龍駕
を廻して六波羅へ成し参らせむとしけるを、前前臨幸の儀
式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰せ出されける間、

範貞
北條氏（一
九九三年）
平等院
天台宗。京都
府宇治郡宇治
町の東北にあ
り。
御逗留ありて
ぞ—給ひける

力なく、鳳輦を用意し衰衣を調進
しける間、三日まで平等院に御逗
留ありてぞ六波羅へは入らせ給
ひける。

日來の行幸に事かはりて、鳳輦
は數萬の武士に打ち圍まれ、月卿、
雲客はあやしげなる籠輿、傳馬に
扶け乗せられて、七條を東へ、河原
をのほりに急がせ給へば、見る人
涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極



(右) 山 置 笠

時移り云云
 唐の陳鴻が長
 恨歌傳の語。
 天上の五衰
 天人が命終ぜ
 んとする時の
 五の異相をい
 ふ。
 人間の一炊
 盧生が趙の邯
 耶の宿舎に
 て、黃梁一炊
 の間に五十年
 の榮華を夢み
 しといふ故
 事。

の高きに坐して、百司禮儀の粧をつくるひしに、今は白屋東
 夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦のきびしきに御心を
 なやまさされ、時移り事去り、樂盡きて悲來る。天上の五衰、人間
 の一炊、唯夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住ひ、
 いつしか思し召しいだす御事多きをり節、時雨の音一とほ
 り軒端の月に過ぎけるを聞し召して、
 住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ
 音をきくにも袖はぬれけり。(太平記)

一〇 准后親房

吉野朝六十年の間は、國史において精彩を放つところ、忠

勇義烈の士が殉國の美譚今に盡きず。楠木正成父子を出し、
 新田義貞一族を出し、菊池氏を出せり。

具平親王
 村上帝の皇
 子。後中書王
 と稱す。(一六
 二三年—一六
 六九年)



北 島 親 房

親房公は村上源氏にし
 て具平親王の裔なり。伏見
 天皇の正應五年にうまる。
 後醍醐天皇の信任を蒙り
 て大納言に進み、世良親王
 の傅となれり。然るに、親王
 不幸にして元徳二年薨じ
 給ひければ、公はわが世盡
 きぬる心地して、官を罷め剃髮して宗立と號しぬ。帝を御始

として朝野惜まざるものなし。親房公の建武中興の際に幹
旋せし事蹟は、更に史籍の徴すべきものなしと雖も、中興の
後また出仕して従一位に敘せられ、大臣に准ぜられたるを
見れば、その決して無爲ならざりしことを知るべし。ただ九
重雲深くして、世間にその消息を漏さざりしのみ。

建武中興の後、間もなく公武の軋轢は起れり。護良親王の
英邁なる、夙に足利尊氏の奸謀を察して、これを除かんこと
を謀り給へり。新田、楠木等は固より宮の身方なりしならん。
然れども、更に親王の黒幕として計策を運らせる一箇の人
傑ありき。これ親房公なり。案ずるに、親王の御母は公の祖父
大納言源師親の女にして、親王の妃は公の妹なれば、公と親

王との結託深きは、これにても推し量らるべし。もし後醍醐

可以安設國海田庄地頭職保補高野山
蓮花寺院勸學料前事
右為代祖考及息顯從一位右大臣等可
於當山建立一院始置進善勤行由來之
素意心中之願念之而如聞有當院學業
殆為一山傳法之惠命料前錯乱之後
學頭學承之依怙一向如無今思此事
不勝嘆息然乃暫聞彼發願欲復補
件關分仍以當庄地頭職可死新行備
案物理に新進寺院始置勤行不無繼欲
絶之錢興欲廢之學高祖親見此志
可感若已現得達其理不疑欲但料前復
本學承出坊名且應承且因思慮進可
計少法有善勤事扶登白如件
心平壬午四月一日三宮一品沙門

北 自 親 房 筆

天皇にして、親王と公とに聞
きて果決の手段を取らせ給
ひなば、たとへ尊氏を除くこ
と能はざりきとすとも、その
肘を掣して決して跳梁する
ことを得ざらしめしならん。
親王の惨死は親房公の爲に、
建武中興の爲に一大打撃な
りき。

元弘三年十月、親房公の男顯家、陸奥守に任ぜられ、義良親

方寸
列子に、「吾
見子之心
矣、方寸之地
虚矣、幾聖人
也。」

王を奉じて陸奥に赴く。顯家歳十七。公これを伴ふ。實に東國經營の大規畫にして、廟謨のある所歴歴見るべく、而してこれが建議は必やこの公の方寸に出でしことと想はる。尊氏叛するや、公は顯家と共に義良親王を奉じ、奥羽の兵を率ゐ、電馳して西上し、新田義貞等と合して大いに尊氏を破り、鎮西に奔らしむ。

大湊
三重縣度會
郡。

延元元年十二月、帝神器を奉じて吉野に幸し給ひ、綸旨を四方に下して勤王の義士を招き給ふ。時に親房公、その子顯信と共に伊勢にあり。伊勢、志摩、紀伊を經略し、水軍を興し、大湊を以て東國交通の關門となし、東西相通じて京師を恢復し、建武中興の大業を復せんとせり。

藤島
福井縣吉田
郡。

とぞ聞えし

小田城
茨城縣筑波
郡。

衆星の云云
論語に、「爲
レ政以德、譬
如北辰居
其所、而衆星共
レ之。」

然れども吉野朝廷の形勢振はず。延元二年五月、顯家和泉の石津に戦死し、閏七月、義貞また越前の藤島に戦死す。龍虎の兩將殆ど同時に亡び、吉野朝廷はその股肱を失へるさへあるに、延元四年八月には、後醍醐天皇南山雲深き所にて崩御あらせ給ひけり。御年五十又二とぞ聞えし。時に親房公は常陸の小田城にあり。この悲報に接しては、萬斛の涙落ちて、逆旅の雨とやなりにけん。後村上天皇立ち給ふに及びて、公は身東國にありて、なほ先帝の顧命と新帝の依託とによりて、遙に政務を與り聞けり。獨吉野朝廷のみならず、海内の官軍は公を中心とし、骨子として、これを仰望すること衆星の北辰に向ふが如く、九州の阿蘇氏、關山幾百里の遠を辭せず

して、成敗をこの人に請ふに至れり。げにや公一身の徳望は大にして、その任も亦重からずや。

常陸における親房公は、最も苦心慘愴、あらゆる艱難を嘗め盡せり。結城親朝を奨めて百方兵を出さしめんとせしかども、親朝言を左右にして更に應ぜず。加ふるに小田の城主小田治久異圖あり。興國二年十一月、遂に敵を城中に導けるを以て、親房公は出て關城に移り、大寶、伊佐、眞壁、中郡、西明寺の五城をつらねて敵軍と相持す。然れども形勢日に益非なり。

興國の年號ありと雖も、吉野朝の運いまだ開くべしとも見えぬ。雲南山に深うして、天つ日の光八紘に照り渡らず。ま

結城親朝
宗廣の子。(一
二〇四二年)

小田治久

(一二〇二二

年)

關、大寶、伊
佐、眞壁、中
郡

共に茨城縣眞

壁郡。

西明寺

栃木縣芳賀

郡。

楚歌四面に起

る
史記、項羽本
紀に、項王軍
壁_二下_一、兵少
食盡、漢軍及
諸侯兵圍之
數重。夜聞_二漢
軍四面皆楚
歌、項王乃大
驚曰、漢皆已
得_レ楚乎、是何
楚人之多也。

職原鈔

二卷、歷代、官
職の沿革およ
び補任の次第
を述べたり。
臥雲日件録
七十四冊。北

して關城の夜雨蕭蕭として羈愁を催す時、楚歌四面に起る。しかも、公はなほこの間において胸中綽綽たる餘裕ありて、曾て草せし神皇正統記を増補訂正したり。神皇正統記は國文にて物せる國史の上乗なるものにして、筆を神代に起して後村上帝の興國年間に及ぶ。著述の意、一に名分を正し、正閏を分たんとするにあり。その議論は堂堂として極めて公平に、興亡成敗を論じて識見卓拔なり。公は有職故實の道にも明なれば、さきに後村上天皇の立ち給ふや、兵馬倥傯の際、職原鈔を草してこれを吉野朝廷に上れり。その博學洽聞なることは、臥雲日件録には、前に三房あり、後に三房ありと稱し、三内口訣には、宏才博覽、世の推すところといひ、尺素往來

禪和尚の著。
 前の三房
 大江匡房、藤原良房、藤原伊房。
 後の三房
 源親房、藤原宜房、源定房。
 三内口訣
 一卷。一名三光院内府記。
 三條西實澄の著。
 尺素往來
 二卷。一條兼良の著。

には、資治通鑑、宋朝通鑑等、人人博くこれを受く。特に北畠入道准后蘊奥を得らる」とあり。その世人に推服せられしこと見るべし。

興國四年十一月、關、大寶の二城遂に陥り、伊佐城も亦尋いで降りければ、常陸の野また南軍なく、公が五年の辛勞、一朝にして水泡に歸し、公は心ならずも海路伊勢に還りぬ。吉野の行宮に、一夜君臣慷慨の涙にくれて、更の闌くるを覺えざりしならん。

志摩、伊勢、紀伊は公が久しく撫養したる水軍の根據地なり。熊野の水師精銳にして鍊熟を以て名あり。公乃ちこれらの水軍をして遠く西に向はしめ、四國、中國の宮方と連合し

て、九州の沿岸および薩摩を抄掠して九州の宮方を援け、奇功を沿海に奏せり。公が准後の殊遇を蒙られたるはこの間のことなり。

賀名生
 奈良縣吉野郡。
 歸しぬるぞ
 悲しき

正平九年四月、親房公大和の賀名生に薨ず。歳六十有二。春老いて花既に落ち、絶代の忠魂また天に歸しぬるぞ悲しき。ああ、吉野朝六十年の久しき、僅に大和の邊隅に天子を奉じながら、京師の精兵に抗して甚しき挫折をなさず、王事に勤むる士心を鼓舞して能く義故を糾合し、足利氏をして寒心せしめしもの、實に公が忠義の精髓を得たりし故にあらずや。子孫また君家に盡して、能く乃父乃祖の遺風を存するもの、ひとしく欽すべきなり。

一一 藝苑逸話

一、繪佛師良秀

良秀
傳未詳。

繪佛師良秀といふ僧ありけり。家の鄰より火出で來ておしおほひければ、大路に出でにけり。人の描かする佛もおはしけり。又物も打ちかづかぬ妻子などもさながら在りけり。それをも知らず、身ばかりただ一人出でたるを事にして、むかひのつらに立てりけり。火はやわが家に移りて煙燄くゆりけるに、大方さりげなげにてながめけるを、知音どもとぶらひけれども騒がざりけり。いかにと見れば、家の焼くるを見て、打ちうなづき、打ちうなづきして、時時笑ひて、「あはれ、し

知音

説苑に、「鍾子期死、伯牙破琴斷絃、終身不復鼓琴、以爲世無知音者。」

不動尊

五大明王の中尊。右手劔を持ち、左手索繩を持ち、背に火燄を負ふ。

我黨こそ惜み給へ

つる所得かな。年頃わろく描けるものかなといふ時、とぶらひ來けるものども、「こはいかに、かくてはあさましきことかな。物の憑き給へるか」といへば、「何條物の憑くべきぞ。年頃不動尊の火燄をあしう描けるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ。この道を立てて世にあらむには、佛をだによく描き奉らば百千の家も出て來なむずるものを、我黨こそ、このさせる能もおはせねば物を惜み給へ」といひて、あざ笑ひて立てりけり。その後、や、良秀がよぢり不動とて人人めであへりけり。(十訓抄)

二、鳥羽僧正

鳥羽僧正は近き世には並なき繪かきなり。法勝寺の金堂

鳥羽僧正
名は覺猷。戯

畫の名手。(一七三三年—一八〇〇年)

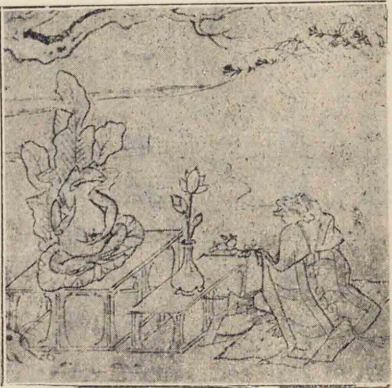
院
鳥羽法皇。



鳥 獸 繪 卷 (僧 正)

の屏の繪かきし人なり。いつ程のことにか、供米の不法の事ありける時、辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹き揚げたる

が、塵灰の如くに空にあがるを、大童子、法師ばらが走り寄り取りとどめむとしたるを、さまざまに面白う筆を揮ひて描かれけるを、誰がしたりけむ、その繪を院御覽じて御入興ありけり。その心を僧正に御尋ありければ、あまりに供米不法に候ひて、實の物は入り候はで、糠のみ入りてかるく候ふゆゑ



覺 猷 筆

米の沙汰嚴しくなりて、不法のことなかりけり。(古今著聞集)

一一一 遠キ慮

- 一 遠キ慮ナキトキハ必ズ近キ憂アリ。(論語)
- 一 過ギタルハ猶及バザルガゴトシ。(論語)
- 一 舜モ人ナリ、我モ人ナリ。(孟子)

桃李不言下自成蹊

李將軍傳

- 一 巧ナル詐ハ拙キ誠ニ如カズ。(鹽鐵論)
- 一 己ノ欲セザル所ハ人ニ施スコトナカレ。(論語)
- 一 病ハ口ヨリ入り、禍ハ口ヨリ出ヅ。(口銘)
- 一 好事門ヲ出デズ、惡事千里ニ傳ル。(事文類聚)
- 一 玉琢カザレバ器ヲナサズ、人學バザレバ道ヲ知ラズ。(禮記)
- 一 桃李言ハザレドモ、下自ラ蹊ヲナス。(史記)
- 一 水至ツテ清ケレバ魚ナシ。人至ツテ察ナレバ徒ナシ。(漢書)
- 一 瓜田ニ履ヲ納レズ。李下ニ冠ヲ整サズ。(文選)
- 一 道邇シト雖モ行カザレバ至ラズ。事小ナリト雖モ爲

サザレバ成ラズ。(荀子)

一 恆産ナキ者ハ恆心ナシ。(孟子)

一 心ハ小ナランヲ欲シ、志ハ大ナランヲ欲シ、智ハ圓ナ

ランヲ欲シ、行ハ方ナランヲ欲ス。(文子)

一 普天ノ下、王土ニアラザルハナク、率土ノ濱、王臣ニア

ラザルハナシ。(詩經)

天雲尚休す限り谷嶺の
さわたり極み

一三 蓄音機

エジソンの蓄音機の發明が登録されたのは千八百七十
七年で、我が國では西南戦争の年であつた。太平洋を距てて
起つた、この二つの出來事には何の關係もないやうなもの

Thomas Alva Edison エジソン
米國の電氣
機械發明
家。蓄音機、
活動寫眞等
その他大發
明多し。西
曆一八四七
年生まる。

の、我が國の文化發達の歴史を、西洋のと引き合はせて見る時の一つの目標になるのみならず、少くとも私にはこの偶然の合致が、何事かを暗示する象徴のやうにも思はれる。蓄音機は今では世界の隅隅まで普及してゐるが、私自身と蓄音機との交渉の歴史にも、頗る痛切で忘れ難いものがある。

西南戦争に出征して居た父が、戦亂平定の後、家に歸つたその年の暮に私が生まれた。その私が中學校の三年生か四年生の時であつたから、ともかくも蓄音機が發明されてから十六七年後の話である。或日の朝中學校の揭示場の前に、大勢の生徒が集つて、揭示板に現れた意外な告知を讀んで、

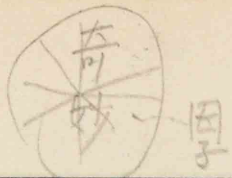
中學校
高知市の中學
校。

若い小な好奇心を動搖させて居た。今度文學士何某といふ人が蓄音機を携へて來縣し、今日午後講堂でその實驗と説明をするから、生徒一同集合せよといふのであつた。生徒の喜んだ事はいふまでもない。その時歡聲を擧げた生徒の中に、無論私も交つて居た。

校長の紹介で講壇に立つた文學士は、堂堂たる風采をして居た。頭は毬栗であつたが、その代に立派な漆黒な鬚は、教頭のそれよりも立派であつた。大きな近眼鏡の中からは、智慧のありさうな眼が光つて居た。まづ器械の歴史からその原理、構造などを明快に説明した後、愈實驗に取り懸つた時には、異常な緊張が講堂全體に充滿して居た譯である。

愈蠟管に聲を吹き込む段となつて、文學士は吹込喇叭を、その美髯の間に見える紅い唇に押し當てて、器械の制動機を弛めた。さうして驚くやうな大きな聲で、高い山からの俚謠を歌ひ出した。

私はその瞬間に經驗した不思議な感じを、三十年後の今日でも、ありありとそのままに呼び返す事が出来るやうに思ふ。その奇妙な感じを完全に分析して説明する事は、到底不可能であるが、種種雜多な因子の中には、勿論緊張の弛緩から來る純粹な笑もあつた。其處に實際くすくす笑ひ出した不謹慎な人もあつたやうであつた。然しそれは必しも文學士その人に向けられた笑ばかりでは恐らくなかつたら



うと思はれる。この講堂建築以來、この壇上で發せられた人間の聲の中で、これ位珍しい物はなかつたに相違ない。忠君愛國、仁義、禮智などと、直接何等の交渉をも持たない、瓜や茄子の花ざかりが高唱され、その終には彼の全く無意味で、そして最も平民的な囃が朗朗と附け加へられたのである。私はその時何といふ事なしに、矛盾、不調和を感ずる一方では、また奥深い岩室の中に、そよそよと一陣の春風が吹き、一道の日光がさし込んだやうな心持もあつた事を自白しなければならぬ。

吹込が終つた文學士は、額の汗を押し拭ひながら、その装置を取り外して、更に發聲用の振動膜と喇叭とを取り附け

た。器械が動き出すと共に、今の歌がそろそろ出て来た。それは妙に押し潰されたやうな鼻聲ではあつたが、ともかくも特徴ある文學士の聲の抑揚を、可なり忠實に再現したので、講堂の中からは自然な感歎の聲と、抑へつけた笑聲とが一時に沸き上つた。

この一日の出来事は、私の中學時代の思出の中に、目立つて抜き出た目標の一つになつて居る。一つにはこの泰西科學の進歩が齎した驚異の經驗が、私の子供の時から芽を出し懸けて居た科學一般に對する愛著の心に、強い衝動を與へた爲であらうが、その外にまだ何かしら、或啓示を與へたものがある爲ではないかと思つて居る。私は今でも事に觸

自明快

吉村冬彦
本名寺田寅彦。明治十年高知市に生まる。東京帝國大學教授、理學博士。

れて、この文學士の「高い山」を思ひ出す。あの時にあの罪のない俚謠から流れ出た自由な明るい心持は、三十年後の今日まで消えずに残つて居て、行き詰り勝な私の心に、有益な轉機を與へ、しやちこ張りたがる氣分に、ゆとりを與へた。これは恐らく、私の長い學校生活の間に受けた、最もあり難い教の中の一つではなかつたかと思ふ。業に疲れ生に倦んだ時に、私は色色の形式で色色の「高い山」を唱ふ。さうして新しい勇氣と希望とを呼び返すのである。吉村冬彦「冬彦集」

一四 心の耳

心柄といふものは、ほんの一寸した言葉の端にも露れる

寺
作者は當時千葉縣葛飾の或寺に假寓したりき。
銚子
千葉縣海上郡にある港。

ものである。

私のゐた寺の坊さんに、ある時銚子行の川蒸汽の話が出たので、此處から銚子までは餘程でせうね」と訊くと、「いや大した賃錢でもありません」と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんは大變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、とんでもない俗僧であることを私に知らしめてしまつた。

だから、その後、その坊さんが、田圃の蛙が鳴いたら、石油をぶつ懸けなさい」と云つてくれた親切な言葉にも、私はさほどに驚きはしなかつたのである。

古池や云云
松尾芭蕉の句。

古池や蛙飛び込む水の音。

とは大變な違ではないか。

又ある時、三人の男が膝を交へて坐つてゐた。その時バナナをお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が「ああ、いいな」といつた。一人は「だめぢやないか、青いな」と云つた。一人は「全く小笠原のは値ばかり高くてね」と云つた。三人とも親しい友達だつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はその珈琲店の主人だつた。畫家は、その時、色のかがやきを觀た。商人は味を感じた。そしてその店の主人公は値を考へて一緒に「はつと思つたのである。この中の誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。畫家は無論輝いた青い色を觀たばかりではあるまい。そ

小笠原
八丈島の南百八十裡に在り。大小數十の島嶼より成る。文祿二年小笠原貞頼の發見。今は東京府の所管。

の輝の底に潜むバナナの生きた命そのものをも観透したに違ない。

昔の武藝者は、霜のふる聲にも目を覺したといふが、それは恐しい位張り詰めた心そのもので感ずるので、單に耳だけで聽いてゐるのでは無い。身體全部が耳になり、身體全部に満ち渡つた精神力そのもので感ずるのである。これ位隙がなくなれば占めたものだ。

然し、それにしても、初はやはり耳から入つてくるのであるから、とにかく耳から鍛へ抜かないといふと、それほど澄み入る譯にはゆかない。

譬へば、醫者が病人の胸の上から、指先でとんとんと打つ。

あれなども、耳だけで音ばかりを聽いてゐる譯ではない。そこは熟練で音を聽くといふより、直覺である。指先がその場合耳になつてゐる、身體全部が耳になつてゐる、心が耳になつてゐる。

もつと際どい話になると、よく太刀風三寸にして身を交すといふ、眞つ暗がり、後からさつと來る、はつと思つた瞬間に、名人ならば、ひよいと交す。これは耳で識るのでは無い。身體全部の直覺で、はつと悟るのである。そこまでゆくと、全く身體は鍛へ抜いてある。

それがなかなかの事であつて、生半可の修業者には滅多に出来る話ではない。

私の郷里
福岡縣山門
郡柳河町。

北原白秋
詩人。名は隆
吉。明治十八
年福岡縣柳河
町に生まる。
早稻田大學英
文科に學ぶ。
詩歌童謡隨筆
等の著作多
し。

藝道の極意に達した程の名人は、流石にみんな違つてゐる。私の郷里に、大さんといふ盲人の琴の師匠がある。琴にかけては永年の修業で、今は全く名手と云つていい。その盲人はいつも粗末な荒壁のままの床の上に、圓胴の小さな太鼓をたつた一つ置いて、それを背後に、いつも惚れ惚れと坐つてゐる。太鼓の音に聴き入つてゐるのである。心の耳が澄んで來ると、敲かぬ太鼓の音までも聞えて來るといふのである。そこまで達した大さんは實にえらい。これは一つには琴の方で、音といふ音を聴くことに修練しぬいたお蔭である。三昧に入つてゐる。(北原白秋―洗心雜話)

一五 郵便はがき

書牘の妙は眞率平易、而して脈脈たる情趣の掬すべきあるにあり。疎なるを嫌はず、板なるを厭ふ。拙なるを避けず、纏なるを斥く。若しその妙機を捉へば、一片の郵便はがきも、その神味を傳ふるに於いて餘幅あるべし。

嘗て、東坡の人に與ふる書を見る。

歲行盡矣、風雨凄然、紙牕竹屋、燈火青熒時、於此間得少佳趣、無由持獻、獨享爲愧、想當一笑也。

一讀の後、瞑目靜想する時は、曠世の奇才を懷ける東坡が、風雨障子を敲き、一燈豆の如く微に、物さびしきいぶせき伏屋に案じ暮したるさま、ありありと眼底に映じ、而してその所

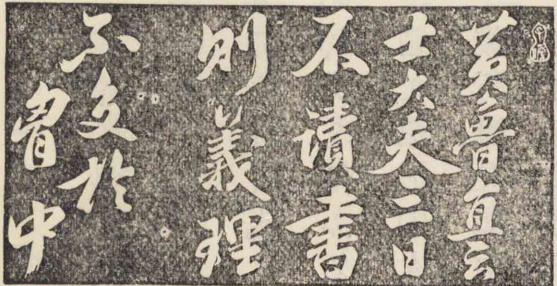
東坡
宋の文豪蘇軾
の號。西曆一
〇三六年―一
一〇一年。

謂少佳趣も亦髣髴として神來するを覺ゆ。佳趣とは何ぞ、彼眉山の才子、この凄亮たる境涯中より却つて一種の快感を探り來りて、樂意を催したるものこれなり。萬古の幽情を暢

ぶる必しも萬言を要せず。

又嘗て、賴襄が雲華師に與ふる書を
見る。

今日の雪には必ずいづれへか御出掛と存じ居り候。明朝は大分下物もこれあり候上、某子より一小陶の古酒もらひ候。これにて尊師と一酌と存じ候。その爲走筆かくの如く候。臘

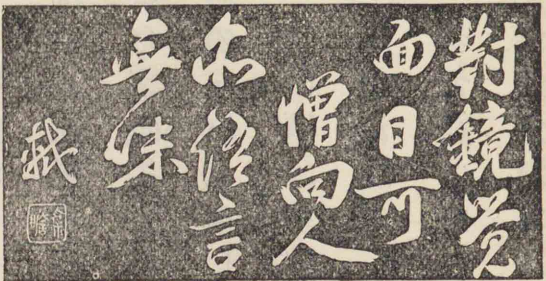


蘇 東 坡

賴襄 通稱久太郎、字は子成、山陽と號す。安藝の人、京都に住す。漢學者にして最も史筆に長じ、日本政記、日本外史等の著あり。天保三年九月歿す。(二四四〇年—二四九二年)
雲華師 東本願寺の講師。畫に巧なりき。

望。梅上之雪既消而、山山始霞矣。

「梅上之雪」の一句添へ來りて全文舞はんとす。もとより東坡の「風雨凄然」の一書、憂中に樂あり、樂中に憂あり、絃外の餘韻嫋嫋として盡きざるものに比すべくもあらずと雖も、情韻雙絶、逸興天外より墜つ。又かの芭蕉の書牘に至りては、清超の天機を微言の裏にもらし、



筆

無邊の幽情を冷語の外に寄するもの、一二にして足らず。

俳諧御執心の由まづは珍重、物識にならんより心の俳諧肝要に御座候。句者は澤山御座候へども、心法を守る人は

芭蕉 俳諧正風の祖。松尾氏。名は宗房。伊賀の人。江戸に住し、諸國を行脚せしが元祿七年大阪に客死す。(二三〇四年—二三五四年)

増山の井
二卷。俳諧に
用ゐる四季の
詞を類聚した
るもの。

其角
櫻木氏。蕉門
十哲の首。二
三二一年―二
三六七年

稀稀なるものにて候。

季よせの御不審御尤に候。愚老はこの事にうとく候儘、考
後より申し入るべく候。増山の井御用然るべく候。

子規なくや黒戸の濱びさし。

洵にこれ蕉門唯一の傳心法なり。説き得て急切ならず、唐突
ならず。而してまた寒酸の氣味なし。平淡にして自然に入る
ものといふべし。

この頃は俳諧殊の外不出來に候へども、御望に任せ進上
いたし候。尤も、其角が無分別なる所、中中及ぶべからずと
皆皆驚き申し候。

ただ無分別の三字下し來りて、豪宕磊落、天井を睨みつめて

想を構へし其角その人を活現し來る。しかもまた無分別の
三字、其角が俳句の鐵案といふべし。又、

初鯉御振舞下さるる由、かかる隱居の似合はしからず候
へども、おもと殿御志、追付參上。

和夷平曠の性情掬すべし、彼、豈矯直を以て世俗を避くるも
のならんや。また豈高蹈を以て人間に誇るものならんや。
思ふに赤心を以てし、書くに眞實を以てせば、文の妙機を
捉ふるに於いて餘師あらん。若し誤りて佳句警語に汲汲た
らば、既に野狐禪の魔界に墮落したるものと知るべし。

(徳富蘇峯―蘇峯文選)

一六 曼珠沙華

斎藤茂吉

ふしよしの松をわたりりりけふ

曼珠沙華咲き秋の風吹き

若山牧水

いよほ越えまゝゆれば寂をそれ

はかなしむぞやもも枝ゆく

前田夕暮

野ぐさの見のつけ紐はまらけり

まろくともくわゆる草かな

斎藤茂吉
醫學博士。明治十四年山形縣に生まる。アララギ同人。

若山牧水
歌人。名は繁。明治十九年宮崎縣に生まる。雜誌「創作」主宰。

前田夕暮
歌人。名は洋造。明治十八年神奈川縣に生まる。

島木赤彦
歌人。本名は久保田俊彦。明治九年長野縣に生まる。アララギ同人。

石川啄木
文士。名は一。明治十九年岩手縣に生まる。独自の歌風を拓く。明治四十五年歿す。(二五四六年—二五七二年)

尾上柴舟
文學博士。名は八郎。明治八年岡山縣に生まる。東京女子高等師範學校教授。

寝つて讀む本の重さに

つかれたる

手を休めては物も思へり

啄木

石川啄木筆

島木赤彦

あかりみくふ窓れそとハ冬田なり

荒うく湖なり鴨のゆきうら

石川啄木

いのちけきめれな

とてよとていと

捨れがゆびの首

とより落ら

尾上柴舟

つげろく野火れ烟のあふいと

與謝野寬

歌人。京都の人。明治六年生まる。雜誌「明星」を主宰す。慶應義塾大學講師。

よもぎゆく浪ぞ山いづかき

與謝野寬

こき心やまはるあまのこころ枝の

さつきまの林うぶひまのななく

金子元臣

いざれ苗おけどもはげ揚巻れ

いづの心まれば忘れ

佐佐木信綱

ゆ秋のやまの風れやうの

塔のうつたうとまひれ雲

金子元臣

國文學者。歌人。明治元年東京に生まる。御歌所寄人。國學院大學教授。慶應大學講師。

佐佐木信綱

文學博士。歌人。明治五年伊勢に生る。東京帝國大學講師。

入江爲守

子爵。東宮侍從長、宮内省御歌所長。明治元年京都に生まる。

落合直文

國文學者。萩の家主人と號す。仙臺の人。明治の國文學復興及び和歌革新に大功あり。明治三十六年歿す。(二五二一年—二五六三年) 小出 祭

入江爲守
月影のにやふむらう音たぎ、
かたはらのぼろ海づきのやど
落合直文
つらきまをみまをむつらむ
おやまをむつらむこもあつら
小出 祭
うらむまをむつらむこもあつら

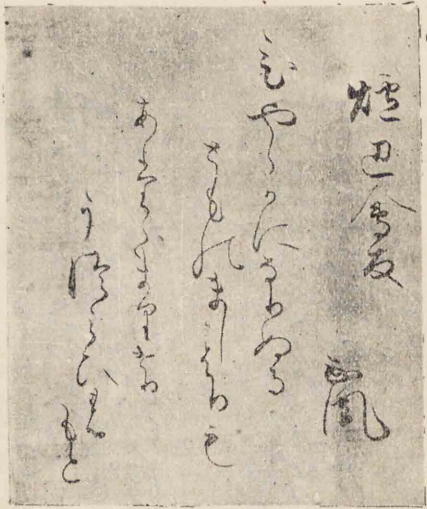
入江爲守
月影のにやふむらう音たぎ、
かたはらのぼろ海づきのやど
落合直文
つらきまをみまをむつらむ
おやまをむつらむこもあつら
小出 祭
うらむまをむつらむこもあつら

筆綱信木佐佐

の門。御歌所
寄人。明治四
十一年歿す。
(一、二、五、六、八
年)
高崎正風
男爵。樞密顧問
官。宮内省
御歌所長。鹿
兒島の人。入
田知紀の門
人。明治四十
五年歿す。(二
四、九、六、年、一、二
五、七、二、年)

梅のにわひりなりにかろかな

高崎正風



高崎正風 筆

うらみみり膝にまゐ
うらみみり膝にまゐ
わがまゝ人のま
かゝるぞうらみ

一七 鹽原

車は馳せ景は移り、境は轉じ客はかはれど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦み疲れつ

つ、はじめて西那須野の驛に下車せり。

直に西北に向ひて、今尙茫茫たる古の那須野が原に入れば、天は闊く地は遐に、ただ平蕪迷ひ斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行く程に、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に淙淙の響ありて、これに架れるを入勝橋となす。

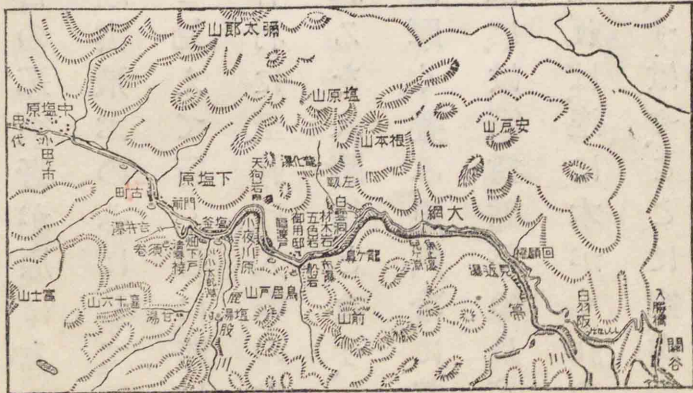
橋を渡りて僅に行けば、日光暗く山厚く疊み、嵐氣冷に壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹聲聲の鳥啼き、前には幽草歩歩の花をひらき、愈登れば、遙に木がくれの音のみ聞えし流の水上は浅く見れて、すはや、ここに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は

西那須野
郡。栃木縣那須

この緒よりや
拾遺集、齋宮
女御、琴の音
に峯の松風か
よふらしいづ
れの緒よりし
らべそめけ
むし。

山を剷りて長壁となし、谷幽に蘚碧にして、幾條ともなく白
絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の珊珊
として灑げるは、嶺上の松の調も定
めてこの緒よりやと見捨て難し。

白羽阪を踰えてより、回顧橋に三
十尺の飛瀑をふみて、山中の景はは
じめて奇なり。これより行きて、道あ
れば水あり、水あれば必ず橋あり、全
逕にして三十橋。山あれば巖あり、巖
あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十
瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五



湯。なほ數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、一一探り得べく
もあらず。



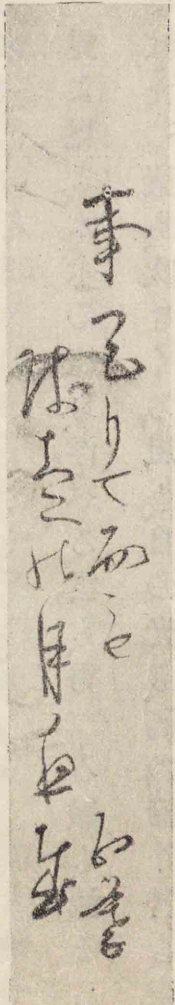
りて白雲洞は朗に、布瀑、龍が鼻、材木石、五色石、船岩など眺め

行けば、鳥居戸、前山の翠衣に染みて福渡戸の里に入るなり。それより前面に幾百仞の巨巖嶙峋たる天狗岩の奇勝を仰ぎ、小夜の河原の激湍に怪石の磊砢たるを俯瞰し、途すがら崖のところどころに咲き残りたる躑躅、山藤などうち眺めつつ行くほどに、鹽釜の湯、甘湯澤、小太郎が淵など早くも過ぎて、いつか畑下戸の里に著きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて五軒の宿あり。ここに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯すれば水石の粼粼たるを見、仰げば西は富士、喜十六の翠巒と對して清風座に満ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたるとき吉井瀑となり、東

北は山また山を重ねて琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるるなど、またあるまじき別境なり。

我はこの繪を看るとき清穩の風景にあひて、かの途上



筆葉紅崎尾

嶮しき巖と激しき流との爲に、いく度か魂飛び肉消して、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れてたり。

まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來る事の甚だ遅かり

何ぞ遅かり

おのれこそ
愚の者なれや

し。山の麗しといふも壤の堆きのみ、川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざるわが半生の痼疾は、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚の者なれや。

見よ見よ。木木の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るる溪も、そばたつ巖も、吹きくる風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はここに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、今よりかくの如くにしてわが生を終へんかな。(尾崎紅葉)

一八 苦行者と蛙

或處に一人の人間がゐた。彼は洞穴の口にある石の上に坐つてゐた。何時から彼がそこに居て、どれだけ長い間そのやうにぢつとして居たかを私は知らない。とにかく、そんな一人の人間が居た。

或時、その人間の眼の下へ一疋の蛙が出て來た。蛙の方では、初その目の前に坐つて居る人間には氣が附かなかつた。それ程その人間はぢつとして居たからである。然し、目の前に坐つて居るのが、生きた人間であつたのを蛙が知つた時、蛙は驚いた。

「そこに石のやりに坐つて居るのはどなたですか。蛙はその人間を見上げてさういつた。

「私か。私は苦行者だ。」

さう人間が答へた。蛙は苦行者といふ言葉をよく知らなかつた。そこで蛙は重ねて聞いた。

「苦行者？さうしてあなたは、そんなにぢつと坐つて一體何をなさるのです。」

そこで苦行者は再び答へた。

「私はぢつと坐つてゐる。私は私の眼を私自身の世界を幸福にする星の上に置いて、また私は私の心を私自身の地球の核心に据ゑて、私はかうして、私の宇宙の天體と地球との

運行を一心に調節してゐる……。」

「謎のやうなことは仰らずに」と蛙は苦行者の言葉を遮つた。どうぞ無學な蛙にもわかるやうに仰しやつて下さい。要するにあなたは何の爲にそんな事をなさるのです。」

「一口にいへば」と苦行者が答へた。私は不死を求めて居るのだ。人間と永遠とを一つにしようとしてゐるのだ。」

さう聞いて蛙は躍り上つた。

「おお！このお方こそ私の捜してゐた先生だ。噂に聞いたあのお方だ。先生、どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」

それから蛙は持前の雄辯で、彼の身の上と彼が苦行者の弟子になりたいといふ理由とを説明した。これによると、こ

の蛙はもとイソツナ物語のなかの古沼の蛙の一人であつた。その時彼の故郷である古沼では大變な騒動が起つて居た。その古沼の蛙たちは、彼等自身を統治するに足るやうな強い立派な王様を、彼等自身以外に欲しいと神様に御願をしたのが因で、神様は最初に王様として木の丸太を下さつたのだ。けれども、もつと強い立派な働のある王様を、と蛙たちが重ねて願つた時には、神様は怖しい鱈をその古沼の王様として授けて下さつた。鱈は位に即くと同時に、手あたり次第に蛙を喰ひ殺し始めた。そこで蛙たちの或者は神様を呪ひ、或者は新しい王に對して一揆を企てた。多くの蛙たちはその父や母や妻や子を鱈に喰はれた。

「かうして」と苦行者の前の蛙はいつた。私は多くの死を見ました。また我勝に鱈の口から逃れようと争つてゐる同類のあさましさを見ました。さうして私は世の中を悲しいものだと見て取りましたから、ある夜その沼から遁れ出して、水を遡つて遠い旅を續けました。私はその途中で先生のお噂を承つて、その時からどうかして先生のお弟子になりたいと思つて居たのです。先生どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」

「とにもかくにも、此處に私と一緒に居ろ。」

苦行者は蛙にさう答へた。かくして蛙は苦行者の弟子になつた。蛙は先生の前に兩手を突いて坐つた。彼等は互に向

ひ合つて坐つた。彼等はただ黙つてゐた。日の光と月の光とが、上からこもごも彼等を照した。また時には闇が彼等をすつぽりと裏んだ。さうして、そんな時には近くの樹の梢に梟が來て啼いた。その度毎に蛙は怖しさに身慄をした。けれども我慢をして蛙は黙つてゐた。蛙の身のまはりには苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いてまた散つた。その青い苔は蛙の體のまはりに擴つた。蛙の坐つてゐる足もとから盛り上つて來た。とうとう苔は蛙の體の上にも生えて來た。蛙は苔のために雨蛙のやうに青くなつた。けれども我慢をして蛙はぢつとしてゐた。或朝の事であつた。

「先生！」と蛙が叫んだ。先生、私はもう先生のお弟子は厭に

なりました。」

そこで苦行者がいふのには、

「それはまたどういふ譯だ。」



(筆啓祥) 廣 總 壁 面

すると蛙が答へた。

「私は私の故郷へ歸りたくなつたのです。あの古沼が懐しいのです。私は私共の仲間が今どうしてゐるかが知りた

唯心
唯物
宇宙の創造
宇宙は成立して
我は其の一分子である

いのです。友だちが戀しく氣に懸るのです。それに仲間のあの怖しい騒を打ちすてて、自分一人がこんな處に逃げ來てゐるのが、自分自身で恥しいのです。私は今の私が、私の仲間に対して何の仕事をも盡してゐなかつた事に、今氣が附いたからです。

苦行者は聽き終つてさといふには、

「お前はお前の仲間ではない。但お前自身だ。」

「それなら先生」と蛙が重ねて反問した。

「私は私自身の爲に何の仕事をも今してゐるでせう。」

そこで苦行者が重ねていふには、

「我我は目に見えては何もしない。然し我我は目には見え

ない仕事をする。ちやうど我我の幸福も我我の報酬も、他の人のそれ等の物のやうに目には見えてゐないと同じだ。お前は、お前自身の中にあるお前の仲間を見よ。お前の仲間にあるお前を暫く見るな。又お前自身の中にある世界を見つめよ。世界の中にあるお前を暫く忘れよ。悞れるな。只暫くである。さうして結局は同じことである。」
「先生のお言葉は解らうとすれば高遠だ。ちやうど無いものを搜し出さうとするのにも似てゐる。」
さういひ放つた次の一瞬間に、蛙はもう苦行者の前には居なかつた。何故かといふに、その時蛙は昂然として後の脚で躍り上つたからである。

蛙は石の上から下りると、やがて水の流に沿うて以前遡つたことのある道を歸つて往つた。さうして永い旅の後に、彼は再び故郷の古沼へ歸り著いた。然し、彼が再び古沼に來た頃には、彼の考は又變つてゐた。彼はもう一度やはり苦行者の處へ、もとの先生の處へ往かうと思ひ返した。彼は流を段段と下つて來て古沼を一目見た時に、古沼はそのいいわるいに關らず、彼の本來の氣質には決して向かないことに氣付かずには居られなかつたのであらう。さうして苦行者の教へたやうな物の考方が、その時彼に取つて解り易いものになつて來たのであらう。それとも、もつとはつきりとした理由があつたか、私はそれに就いてはよく知らない。何に

せよ、折角遠い處を故郷の古沼まで歸つて來た蛙が、その同じ遠い路をすぐさま取つて返して、再び苦行者の石の上に來たことは事實である。

苦行者はまだ生きてゐた。生きて元のとほり石の上に坐つてゐた。その苦行者の目の下に再び來て坐つた時に、蛙はいつた。

「先生、私をどうぞもう一度先生のお弟子にして下さい。」
苦行者はもう何もいはなかつた。ただ無表情な顔で頷いた。かうして蛙は再び苦行者の前に兩手を突いて坐つた。彼等は互に向ひ合つて坐つた。彼等はただ黙つてゐた。蛙はちつと先生の瞳を凝視した。蛙はそれを彼自身の世界を幸福

にする星と信じたからである。日の光と月の光とが上からこどもも彼等を照した。又時には闇が彼等をすつぼりと裏んだ。さうしてそんな時には、近くの樹の下枝に鼻が来て啼いた。けれども蛙はもう身慄はしなかつた。蛙の身のまはりには苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いてまた散つた。苔はもう花が咲かなくなつて、その古い苔は枯れて、新しい苔が生え變つた。蛙の體の上に新しく生えた苔にも花が咲いた。それほど長い間、それ程ぢつとして蛙は坐つてゐたのである。蛙はもう苔の花のことなどは忘れてゐた。といふのは、蛙は先生の瞳をばかり見つめて居たからである。さうして彼等は、もとよりいつも唯黙つてゐた。然し或夕方であ

つた。先生！と蛙は叫んだ。

「先生は今どこに行かれるのです。今まで私が私の星として見つめて居た先生の瞳は、もう見えなくなりました。先生のお姿は今消えて行きます。」

苦行者はただ黙つてゐた。

「先生何とか仰しやつて下さい、私を安心させて下さい。」
その時或聲があつていつた。その聲は空を渉るそよ風よりも微で、長い間おのれの聲をも聞かなかつた蛙の耳にだけ、ときれときれに、然しはつきりと聞くことが出来た。聲はいつた。

「蛙よ、私の弟子よ。安心せよ。今お前は悟る、お前の目から私

が消える時に。私の目にはお前はもう疾くに消えてゐる。それ故にお前自身もまた私が消え去ることを恐れるな。本來影である所の我我は、影の世界に入る時には消え去る。然しその時我我はどこにでも、いつまでもある。ちやうど月の照す光が、どこにでもいつまでもあり、しかもそれは目には見えるけれども手に掬ふことは出来ず、手に掬ふすべはないけれども確にあるやうに。

響のない聲がさう語つた。ちやうどその時、深くなり行く夕闇の中に、その爲に光を増した月影は鬱蒼とした樹樹の葉の間から洩れて、その石の上に光が射した。さうして月はその石の上には唯苔ばかりがあるを見た。潺湲たる溪流のひびきが靜寂を語つてゐる。(佐藤春夫—藝術家の喜)

佐藤春夫
小説家。和歌
山縣新宮町の
人。明治二十
五年生まる。

一九 花の譜

一、梅

梅は野にありても山にありても、小川のほとりに在りても、荒磯の隈にありても、啻にその花の美しく香の清きのみならず、あたりのさまをさへゆかしき方に見するものなり。崩れたる土屏、歪みたる衡門、あるは掌のくぼほどの瘡畑、形ばかりなる小社などの、常は眼にいぶせく心に飽かぬものも、この花の一木二木立ちまじりて咲き出でなんには、をかしきものとぞ眺めらるる。たとへば、徳高く心清き人の、如何

ものとぞ
眺めらるる



出師の表
諸葛亮の、蜀
の後主に上れ
るもの。前後
二表あり。安
子順いふ、讀
二出師表、而不
レ泣者、其
人必不忠と。

なる處にありても、その居る處の俗には移されずして、却り



伴露田幸

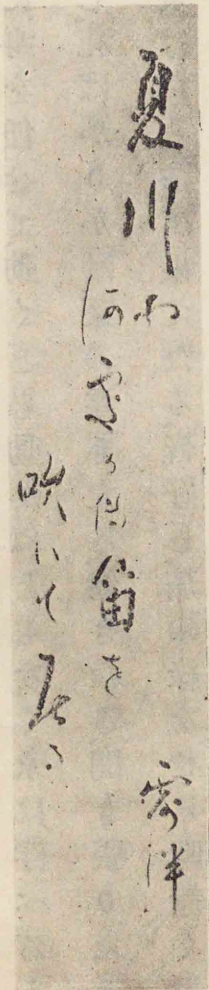
てその俗を易ふるが如し。出師の
表を讀みて涙を墮さぬ人はなほ
友とすべし。この花好まざらん男
は奴とするにも堪へざらん。

二、雪 團

雪團てまりは紫陽花に似て心多こからず。初は淡く色あれど、やが
ては雪と潔くなりて終る。たとへば聊か氣質の偏りたる人
の、年を積み直に進みて、心さま純く正しくなれるが如し。遠
く望むも好し、近く視るも好し。花とのみいはんや。師とすべ
きなり。

三、芙 蕖

芙蕖はすは花の中の王ともいふべくや。おのづから具れる位
高く、徳秀でたり。香は遠くわたれど、巖桂、瑞香、薔薇などのや
うにさし逼りたる如き趣なく、色は勝れて麗しけれど、海棠



筆伴露田幸

牡丹、芍薬などのやうに媚き立てる方にはあらず。人の見る
を許して狎るるを許さざる風情、また儻なく尊し。曉の星の
光の薄るる頃、靄霧立ち罩むる中に開く音する、それと姿を
見ざるうちより、はや人をしてあこがれしむ。雲の峯忽ち崩

れて、風ざわざわと高き樹に騒ぎ、空黒くなるやがて、夕立雨の一しきり降り來るに、早くも花を閉ぢたる賢さ、大智の人の機に先立ちて身を取り置き、變に臨みて悠悠たるにも似たり。ちり際も苔の時も好く、散りての後一ひら二ひら細波に身を任せて、動くとも動かぬともなく水に浮べるも面白し。花ばかりかは、葉の浮きたる、卷きたる、開き張りたる、破れ裂けたる、枯び果てたる、皆好し。茄の緑なせる時、赭く黒める時、いづれ好からぬは無く、蜂の巢なせるものも見て趣なからずや。この花の涼しげに咲き出でたるに長く打ち對ひ居れば、わが花を觀る心地はせて、わが花に觀らるる心地し、顧みてさまざまの汚を帯びたるわが身のかひなく口惜しきを覺ゆ。この花を愛づるに堪ふべき人、そも人の世にいくたりかあらん。

四、朴

朴は山深きあたりの高き梢に塵寰のけがれ知らず顔して、ただ青雲を見て嘯き立てる氣高さ、比べん方なし。香は天つ風の烈しく吹くにも壓されず。色は白璧を削りたればとて、かくはあらじと思はるるまで潔きが中に、尙暖げなる趣さへあり。瓣は一重なれど思ひ切りて大きく咲きたる、なかなかに八重なる花の大いなるよりめざまし。心のさまも世の常にありふれたるものとは差ひて、仙女の冠などにも爲さば爲すべき花の面影、かうがうしく貴し。この花を瓶にせ

武帝 前漢第五代の天子。雄材大略あり、四方を征して國威を輝せり。(西暦前一五七年—前八七年)

誰か一起せざるべき

幸田露伴 文學博士。名は成行。東京の人、慶應三年生まる。嘗て小説家として紅葉と並び稱せられしが、今は小説の著作多し。

んは、ただ人の堪ふべきにあらず。まづは漢にて武帝、わが邦にて豊太閤などこそ、これを瓶中の物となし得べき人なれ。

五、瞿麥

瞿麥は野のもの勝れたり。草多く茂れるが中にこの花の咲きたる、或は水乾きたる河原などに咲きたる、道行く者をして「優しの花や」と獨言たしむ。馬飼ふべき料にとて、賤の子が刈りて歸る草の中に、この花の二つ三つ見えたるなど、誰か歌心を起さざるべき。(幸田露伴「調言」)

二〇 睡蓮

この春ある友達より睡蓮の珍種を貰ひ受けて、徑一尺

五寸許なる素焼の鉢に植ゑおき候處、日を追うて發育し、昨今は日毎に一輪乃至三四輪の優しき花を見せ居り候。烈日かんと照りわたりて、なべての草木の打ち萎れ居り候折に、この花のひとり涼しき笑の眉を開きたるを見候は、そのすがすがしさ何にか譬へ候はん。睡蓮を育つる興味は、最初の一葉の水に浮ぶ時に始り候。唯見る一塊の泥土、誰かこの裏に目を新にする百千の花葉を藏することを想ひ候べき。春暖の加ると共に、この泥土に生のうごめき見え始めて、やがてその間より蝸牛の角の如き數條の芽生じ候。その芽長ずるに隨ひて、尖頭の部分やや太くなり、漸くにしてつぼめる葉

の形を水面に現ずるや、忽ちばらりと開けてべたりと水上に浮び、盆の如く、海月の如く、朧夜の月影とも見るべく、小き蛙の圓座とも稱すべく候。かくて今日一葉、明日二葉、五葉、八葉、圓盤の數、日毎に加りて海中の連珠島の如く見ゆるが中に、やがて一本の花莖長く水面を抽いて、その尖頭に彫刻の如き小蓮花を開き候。その美しく品位ありて、しかもたよりなげに情らしき様は、あたりに友もやあると顧みるが如く、水面を高く離れたるを危むが如く、眩しき日に照し出されて己が美容を羞づるが如く、而して水上の光澤ある圓き葉は、空中の美花に對して競ひて鏡面を捧ぐるに似て、鉢の中の小天

地の景致、うるはしとも面白しとも、申すもおろかに候。一たび花を著けたる後は、晴天なる限、連日二三輪を見せざることなくして十月の半に至り候。一年の三分の一を領して、しかも常に鮮なる姿を現すこと、百日紅その他の命長き花の、をはりの恥多き類にあらず候。一花の壽命は二日を常とし、朝八九時の交に開きて午後四時前後に閉づ。



蓮 睡

閉ぢたる姿は小き鰻の頭の如く、再び翌日の朝陽を迎へて開き、二日目の夕方に至り長へに閉ぢて、やがて力なき頭を水中に没す。終をよくする、亦この花の一徳と申すべきか。

ここに、この花に附屬して御耳に入るべき一話これあり候。小生初睡蓮を植うる時、一しよに三つの鉢を求めて草を植ふ、石をおき、或は金魚を放ちなど致し候ひしが、他の二つの鉢は五日、七日を経れば薄濁して、水面にどろどろの綿を浮べ候に、睡蓮の鉢のみは、日を経、月を越ゆれども、清明澄徹にして少しも濁ることなく候。小生はじめ、家人等、皆皆不思議の事に思ひ候ひしが、よく

よく取り調べ候處、これは贈主の花友達が、曾て亞米利加より取り寄せたる澄水草の根が、睡蓮の根に附著し來れるが爲にて候ひき。この草、細莖狭葉、外觀の甚だ振はざる小草に候へども、一種特別なる化學的分解の作用ありて、その濁水を澄す力は世界第一と稱せられ候。もと亞米利加のどこやらの陰濕なる地方にありしものなるが、ふと植物學者の目にとまりて、廣く世界に恩澤を及すに至りし由、我が臺灣に曾て濁水の滯れる濕地ありて、マラリヤの流行地として名高かりしが、この水草を植うるに及び、全くこの病の迹を絶ちたりと申し候。造化は人のわろき施主の如くに候。一方に病苦を

Malaria マラリヤ

歌に浦の濱木綿云云

萬葉集、人麿、三熊野の浦の濱木綿ももへなす心はもへなす心云云

五十嵐力

國文學者。米

澤市の人。明

治七年生ま

る。文學博士。

早稻田大學文

學部長。

高山は

詩經小雅、高

山仰止、景行

行止。

ロバートソン

イギリスの

説教者。

創造 = 生命 = 現状

課すれば、必ず一方にこれに應ずる藥を備へて、しばらくこれを隠しおき、人智を試みて後にこれを與へ候。世に不用なるものなく、物には必ず二重、三重、五重、百重の意義あり候。歌に、浦の濱木綿の重なる如し」と申し候へども、理趣の重疊層累せること、豈濱木綿に限り候はんや。不一。(五十嵐力―我が書翰)

二一向上

高山は仰ぎ、景行は行ふ。人間の中心に潜める要求は、その有する理想に達せんとするに在り。人は絶えず向上しつづつあるものなり。ロバートソン曰はく、自己の所爲に満足する

者は、既にその進むべき限に達したるなり。かかる人は最早進歩することなかるべし。人は一生不平なるべからず。しかも一生満足すべからず」と。往賢前哲、明に我が前に在り。人生夢にあらず。吾人青年たる者、何ぞ小成に安んずべけんや。

千八百八十三年に死したるニューヨークの大富豪ピーター、クーバーは、幼時家貧にして車匠の弟子たりし時、ニューヨーク市に夜學校の無きを慨し、予若し事業に成功して余が必要以上の財産を得ば、必ず夜學校を設け、商家の弟子若しくは工匠をして智識を得る道を得しむべしといへりき。爾後彼はこの目的に向つて休なく進めり。而して年六十の時に至り始めて素志を達したり。當時既に各區に夜學校

Peater Cooper

ピーター、ク
ーバー

の設ありしかば、彼は更にバリーの諸藝學校に倣ひて、クーパー、ユニオンを設け、これに金を投ずること前後二百萬弗

偶感

高標樂論本衆愚
怪來政客多糊塗
中流屹立吐虹氣
則是人間大丈夫

愛山逸氏

山 路 愛 山 筆

に及べりといふ。果然少年の夢は老年の事實となれり。爾の希望を高くせよ、流は源に水平す。爾が高き希望は、爾が未來の成就を約束するものなり。古代の小説に曰はく、或王ありて一

子を生めり。十二の僧は來りて各一箇の祝福を王子に與へたり。或者は「智慧あれ」と祝し、或者は「美しかれ」と祝し、或者は

「力あれ」と祝せり。最後の僧は「王子よ不満足なれ」と祝しぬ。王はその言の呪咀に似たるを怒りてこれを放逐せり。何ぞ知らん、王子成長の後、總べての事に満足したりければ、力もな

Balfour
英國人。西曆一八四八年生まる。保守黨の領袖。大蔵大臣、外務大臣等に歴任す。



ル エ ャ フ ラ

く熱心もなく希望もなき者となれり」と。バルファード曰はく、吾人が未だその欲する所を得ずして願望を抱ける間は、吾人はなほ搖籃の中に在るなり」と。これ成長すべき希望あるをいふなり。また曰はく、「既にその願望に疲れて眠らんとする時は、これ既に垂死の床に在るなり」と。人の常に青春の氣力を保つ所以は、目前に

ラファエル

イタリーの
大畫家。西
曆一四八三
年—一五二
〇年

コルレジオ

イタリーの
畫家。西曆
一四九四年
—一五三四
年

Collegio

カリストラ
タス

ギリシヤの
雄辯家。一
西曆前三六
一年

Calistratus

デモステネス
ギリシヤの
政治家、雄
辯家。西曆
前三八三年
—三二二
年

Demosthenes

ヘラクリトス
ギリシヤの
哲學者。西
曆前五三五
年—四七三
年

Heraclitus

山路愛山
名は彌吉。評
論家。東京の
人。大正六年
歿す。(二五二
四年—二五七
七年)

山路愛山

名は彌吉。評
論家。東京の
人。大正六年
歿す。(二五二
四年—二五七
七年)

一箇の理想を置いて、これに向つて前進しつゝあればなり。理想なきは死なり。満足は腐敗なり。爾の生活をして平板にして倦み易き行路たらしむること勿れ。人生をして單調なる散文たらしむること勿れ。高尚なる希望をして爾の行爲を熱せしめよ。安逸を貪らず、艱難を歓迎せしめよ。爾の情を、爾の手の爲す所を鼓舞せしめよ。ラファエルの妙作なる「聖セシリア」を見たるコルレジオはいひき、余も亦畫工に「あらずや」と。而して彼は終に傳世の畫工となれり。カリストラタスの雄辯を聽きたるデモステネスは、自己の聲音の極めて低くして明瞭ならざにも關らず、雄辯家たらんと決心せり。而して彼は世界が忘るる能はざる大雄辯家となれり。

ヘラクリトス曰はく、「些細の事務に心を勞し、事物の理を推論する等の事は、往往人をして精力を消亡せしむ。唯吾人を刺激して上に向はしむるものは、純潔なる理想のみ」と。英雄は理想を實現せんことに心を熱したる者なり。

浮世の慾望は人をして何事かを爲さしめずんば息まざると雖も、これを高尚なる希望の人の品位をして天の高きに達せしむるに比すれば、その間霄壤の差なきにあらずと謂ふべし。(山路愛山—愛山文集)

二二 米國民

米國は建國後まだ二世紀にも達しないが、既に立派な國

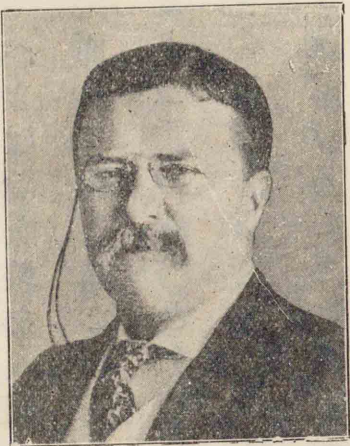
民思想が發達して居る。前大統領ルーズベルト氏の歐洲大戦中になした愛國的演説の中にいつて居る次の言葉は、よくその一般を穿つて居る。

一、二世紀前、この我の祖先がこの國に初めて渡つて來た時分には、その中には舊王侯の領地より逐はれた獨逸人もゐた。又舊教關係によつて國を逐はれた佛人、新教の關係によつて逐はれた愛蘭人も居た。和蘭の商人や技師も居つた。又蘇格蘭の農民も居つた。又ウェールス及びイングランドのキリスト教の一派クエーカー宗徒も居つた。さて諸君、もし是等の人人が相互に相隔離して互に融合せず、ここには和蘭語、そこには獨逸語、かしこには佛蘭西語と別別に話して

Welsh ウェールス
England イングランド
Quaker クエーカー宗

カルビン
新教

居たならば、私が今ここにかくの如く立つて居ることは出來ないだらう。何となれば、私は和蘭から來た祖先の系統を引いて居る。この私の祖先が、他の國民と全く分離し



トルベズール

て彼等自身で生活し、且私がかかる人人のみの系統を引いて居たならば、私は田舎の小役人ぐらゐにはなれたかも知れぬが、この大合衆國の大統領には無論なれなかつたらうと思ふ。しかし我が國民の過去に於ける融合統一は、恰も埧塙の働を爲して居つたのである。ちやうど現在に於いても、同じ状態の埧塙が盛に働い

て居る。また今後も盛に働かねばならぬと信ずるのである。垣塙の働が迅速であればあるだけ、吾等亞米利加人が世界に於ける成業、及び指導者としての地歩は偉大なるべきは論を俟たぬ所である。

而して吾人はこの亞米利加主義に關係して、二重の權利と二重の義務とを有して居るのである。即ち一方にはその生國や信仰の如何に依つて、何人といへどもこれを區別せざることに努むべきと同時に、他方には他國に心を寄せるやうな浮氣な態度を有する人は、決してこの國に生活すべき權利なきことを主張すべきである。吾等が一箇の獨立國民となりたる彼の革命の日には、ワシントン

George Washington
ワシントン
米國初代の
大統領。西
曆一七三二
年一七九
九年

及びその戰場に彼が與黨として働いた人人、即ちワシントンと共に獨立の宣言に連盟した人人は、假令その體に英國人の血液が勝つて居た人であるとはいへ、なほ且英國に對して亞米利加の爲に戦つた人である。

と。要するに亞米利加合衆國の中堅になつて居る民族は、勿論白人種で、土著の亞米利加インディアンなどは片隅に追ひ込められてゐるのであるが、その白人種の中にも、異國民の甚だ多いのは争はれぬ事實である。即ち外國移民の盛に入り込むシカゴ市の市民などは、七十餘國の異國民より成り、又二十餘種の異なつた國語の新聞が發行されてゐる。以て如何に米國民が多くの異民族から成つて居るかがわか

シカゴ
米國イリノ
イヌ洲の都
市。
Chicago

一 非傳統主義
二 冒險的精神
自由主義
實際主義

るであらう。それにも拘らず、彼等の間に共通の民族精神の發達して居るのは、何か然るべき理由がなければならぬ。蓋し亞米利加に移住して居る民族は、或共通の傾向を持つて居る。それは即ち本國の傳統的精神には無頓著な者が多く移住して居る。又一般に冒險的精神に富んで居る者が、各國から集つて居ることも事實である。故に亞米利加に集つて居る白人は、或共通の傾向を持つて居る。而して彼等の共通の傾向は共同事業によつて統一され、そこに國民的精神が發達して居る。即ち亞米利加に於いては、共同事業が最もよく發達して居る。随つてこの精神は政府の力によつて統一されてゐるのではなく、國民各自の共通的傾向によつて統一

一されて居る。故に亞米利加人は考へ込むよりも、常に活動的で、思ひ附いた事はどしどし實行して見ようとする。精神的學問に就いても、應用の方面即ち實際的の方面に於いて特殊の發達をしてゐる。相率ゐて滔滔として流行を趁ふといふやうな現象も、亞米利加に於いて著しい社會的現象である。つまり亞米利加は輿論の國である、群集の國である、廣告の國である。そしてまた廣告が輿論と流行とをつくる國である。(世界人種物語)

二三 嵐の岬

船は今亞弗利加の南端に沿うて走つてゐる。南緯三十四

ダーバン (ポートナ
タル) 英領
Durban 南亞聯邦ナ
タル州の港
市
ケープ、タウ
ン
Cape Town 南亞聯邦西
南端の港
市

度三十五分、東經二十三度十分。ダーバンから五百七十一哩、ケープ、タウンへ二百八十五哩。

天候は快晴だけれども、西南西の強風が船を迎へて吹いてゐる。そして昨日の正午は七十度であつた温度が、今日は五十七度にまで降下してゐる。今度の航海中、今までにない寒さである。昨日の夕刻までは潮流に乘じ追風を受けてゐたので、十四哩以上走つてゐた船が、今日は十哩しか出てゐない。三十尺以上の高波が烈しく左舷に打ち當つて、飛沫は後部甲板までも吹きかかる。左舷から眺められる亞弗利加大陸南端の陸地は、一つづきの山巔である。それが今日も亦、昨日と同じく深碧の水の曠原の果を劃して、茫乎として幻

擬人法

Cape of Storm
ブケープ
ストーム
ムオ

のやうに浮んでゐる。

印度洋と南大西洋との接續する一點、そして亞弗利加大陸の海に沈まうとする絶端である。明日はまた更に、我々の船は嵐の岬へ近寄らなければならぬ。世界の險處、潮流の急激なこの水路では、今日ぐらゐの波はさまで駭くほどのことにはないに違ない。前に展開された海は、今や午後太陽に照されて紺碧の色に輝き、波浪の山が崩れて眞白い銀の總を振り亂し、それが知らぬ間に舷側まで爬ひ寄つて來ては、不意に立ち上つて、雙手を欄干に掛けて甲板へ跳り上らうとする。

亞弗利加大陸の突角を前にして、兩大洋の水が打ち合ひ、

激し合つて演じ出す波浪の狂態は、實に壯觀であつた。何に追はれ、何に魅せられて、波はかくまで狂ひ出したのであらうか。突然高く突き合ひ、立ち上つて互に背丈を比べあふやうな姿をするかと思ふと、さあと高くその頂から一道の飛沫を迸らせて、横さまに共倒をする。一箇處にその波浪の山が崩れ出すと、相次いで幾つかの山が白い頭をもたげて、一時に隆起する。それがまた互に連亘し、手を繋ぎあつて爬ひまはつてゐる間は、一樣の波浪の起伏である。それが不意に一箇處に於いてその連亘が破れる、握手が碎かれる。今までの友情は變じて烈しい怒に變る。直に奔騰し奮起し、飛び立つて互に凌ぎ合ふ。けれどもまた暫くはもとの平和に復し

て、互に白い齒を見せ合つてゐるが、直ぐにまた三文以上の巨身を抜き出して、互に飛沫を散して戦ひ合ふ。戲と怒と、狂態と亂舞と、終日終夜はてしがない。ただ心を一にして向ふのは、己等の頭の上を一直線に乗り破つて行く船に對する反抗と復讐との時である。或者は船の先頭を押へようと船脚へからみ付き、力足らぬ時は怒つて船首へ噛み付いて來る。或ものは兩舷に迫つて、機會だにあらば跳り込まうと幾度試るか知れない。氣早のものは先ばしりして、身軽く跳つて舷を越え、甲板上にさあと飛び込んで來るが、後がつづかないので、飛び込みはしたものの力足らず、きまり惡げに船側の溝の中へ、惶てたやうに迂り込む。懲りずまに後から後

からと、攻撃の先頭の身軽ものが絶間なく飛び込んで来ては、また同じ姿を繰り返してゐる。

静穩な海ならば、船の後方にながく曳く船痕が一海里以上も滑に渦紋を付ける。それを如何にも口惜しさうに、忌忌しさうに、彼等はすぐ後から消してしまふ。出来る事ならそんなものを付けさせまいぞといふやうに、或ものは船底へ潜り入つて、暗車の回轉をとどめようとする。かやうな時は、暗車は如何にも苦しげな絶望的な回轉をなして、烈しく波に齒車を向け、更に苦しくなると、船と共に跳つて、水を離れて上から威しつけるやうなからまはりの不氣味な響をさせながら、また烈しく、ばしやつと波の頭へ打ち當つて水へ

沈む。沈めば更に苦しく足掻き立てて、波を掻き亂す。

實際かやうな日の、波と船との争は一種の壯觀である。人間と自然との争そのままである。船は次第に大きな前後動を受けるやうになつて、船首が水に降る毎に、波はそらつとばかりに船首甲板上へ眞正面に跳り込んで、瀑布となつて流れ落ちる。後部甲板に立つて前の方を眺めてゐると、二丈ぐらゐは一時に降下し、昇登するやうな氣がする。實際水平線を標準にして、その上下へ一丈ぐらゐづつの昇降はあるやうに思はれる。

然し、今日は午後の太陽が眩しく照してゐるので、波の陰謀も十分の効果を奏することは出来ない。それに亞弗利加

大陸が常に一方を劃してゐるので、彼等は一層激せられはするが、船中の人に恐怖を與へる程度は減殺される。日光の照す下では、波の怒も、半はなだめられて戲となる。一面に金色の重みに壓せられて思ふままに狂はれない。雲の重い、日影の見えない、雨を伴ふ暴風の日こそは思ひやられる。日が傾き、やがて夜に入るにつれて船外の世界はただ波浪の響のみになつてしまつた。船内では、卓上のものに押へをおかなければ滑り落ちる騒となつた。

然し、翌日の朝日は、既に我我の前へ喜望峯の尖角を描き出して見せた。船は次第に印度洋の追波を脱れて、大西洋の腕の中に抱かれて行くのであつた。南亞弗利加を構成する

Cape of Good Hope. 喜望峯
亞弗利加洲
南端に近き
岬。

テーブル、マ
ンウト

Table Mount
山。 英領南亞聯
邦南部の

花崗岩の地盤の一端が、遠く南方へ突出したのが喜望峯である。早春の日の光は、淡青の空からこの岬の突角へ落ちて、黒褐色の岩が波に枕してゐるのを照してゐる。その突端から左へ引いて、山陵の起伏してゐる間から、大陸内の遠い山影が濃い藍色に染つて突端を見せてゐる。左端に近く、白い雲の靡きうづまく下に、テーブル、マウンツの一線平に引きなされた山頂が見えてゐる。

船はこの活畫圖の前を爽涼な微風に吹かれながら、次第にテーブル、マウンツの麓、ケープの市街へ近づいて行くのである。最早市街の入口を劃してゐる獅子頭ライオンヘッドと呼ばれる岡が、巨獅の砂上に蹲つて、頭を上げ前脚を伸してゐるやうな

吉江孤雁
文學者。名は喬松。長野縣の人。明治十三年生まる。早稻田大學教授。

島崎藤村
文學者。名は春樹。長野縣木曾神坂村の人。明治五年生まる。初詩作に令名ありしが、後小説に轉せり。

形をしてゐるのが明に見えて來た。一時間を出でないで、
私の船はその埠頭へ著くのであらう。(吉江孤雁―輝く海)

二四 椰子の實 (島崎藤村)

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。
ふるさとの岸を離れて、
なればそも浪に幾月。

もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ蔭をやなせる。

われもまた渚を枕、
ひとり身の浮寝の旅ぞ。

實をとりて胸に當つれば、
あらたなり流離の憂。

海の日沈むを見れば、
たぎり落つ異郷の涙。



椰子林

思ひやる八重の潮路、
いづれの日にか國に歸らん。(藤村詩集)

二五 扇の的

さる程に阿波、讃岐に、平家を背いて源氏を待ちける兵共、あそこの嶺、ここの洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せくる程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ。勝負を決すべからずとて、源平互に引き退く處に、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向けて漕ぎよせ、渚より七八段許にもなりしかば、船を横様になす。あれはいかに

判官
源義經のこ
と。檢非違使
の尉なりけれ
ばいふ。

と見る處に、船の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがひに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかにと宣へば、射よとにてこそ候ふらぬ。但大將の矢面に進んで御覽ぜられむ處を、手だれにねらうて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候ふらむと申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かあると問ひ給へば、手だれども多う候ふ中に、下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵には候へども手はきいて候ふと申す。判官、證據があるか。さん候ふ。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候ふと申しければ、

謀とこそ存
じ候へ

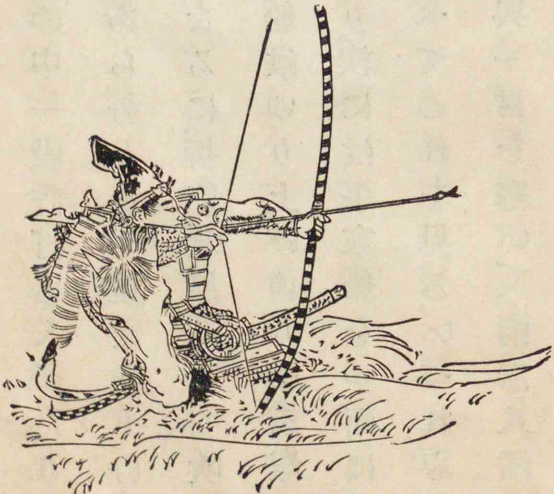
判官、さらば與一呼べ」として召されけり。

與一その頃はいまだ二十許の男なり。褐に赤地の錦を以て襜、端袖いろへたる直垂に、萌黄威の鎧著て、足白の太刀を帶き、二十四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に鷹の羽割り合はせて矧いだりける、ぬための鎧をぞさし添へたる。滋藤の弓脇に挟み、冑をば脱いて高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、いかに與一。あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし」と宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、ながき身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁に仰せ附けらるべうもや候ふらむ」と申しければ、判官大いに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はむざる者共は、皆

鎧をぞ添へたる

べうもや候ふらむ

義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存せむ人は、これよりとうとう鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば悪しかりなむとや思ひけむ、さ候はば外れむをば存じ候はず。御諛で候へば仕つてこそ見候はめ」として御前をまかり立ち、黒き馬の太う逞しきに、まるほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取り直し手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方の兵共、與一のうしろを遙に見送つて、「この



一 與 須 那

若者、一定仕らうずると覺え候ふと申しければ、判官も頼しげにぞ見給ひける。

酉の刻
今の午後六時頃。

矢頃少し遠かりければ、海の中一段許打ち入つたりけれども、なほ扇の間は七段許もあらむとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許の事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ波も高かりけり。船はゆり上げゆりすゑ漂へば、扇も串に定らずひらめいたり。澳には平家船を一面に竝べて見物す。陸には源氏轡を竝べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふ事なし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ず

日光權現
栃木縣日光山なる二荒神社なり。事代主命を祭る。宇都宮
同縣宇都宮なる二荒神社。
湯泉大明神
同縣那須郡那須山にあり。

るものならば弓切り折り自害して、人に二たび面を向くべからず。今一度本國へ歸さむと思し召さば、この矢はづさせ給ふなと心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日のかがかやくに、白波の上に漂ひ浮きつ沈みつ流れけるを、澳には平家舷をたたいて感じたり。陸には源氏箆をたたいてとよめきけり。(平家物語)

さつとぞ散つたりける

二六 鷺江の月明

集美學校から厦門への歸である。

學校の煉瓦をここに荷上したらしいと見える赤い粉のため、濱一面に赤くなつてゐる處へ出て、そこで待ちくたびれて舟の中に晝寢してゐる舟人を喚び起した。舟人は汀を指さして不機嫌である。引汐の勢で歸らうと思つたのに、もう大分退いてしまつたからであらう。その罰といふわけでもあるまいが、逆風だからと舟の日覆を剥がれてしまつた。しかしもう、ぼつぼつ雲が薄れかかつた太陽は、水の上ではそれ程堪へられなくはない。我我の船は逆風のなかに帆

集美學校
支那福建省厦門島の北端と相對する集美と稱する村にある學校。この地方の富豪某の設立せる私立學校にして、小學より大學まで備はりといふ。

鷺江
厦門島を取り圍める灣をいふ。
西湖
支那浙江省にあり。

を揚げてまぎりながら、厦門島の山蔭を山に近く縫うて往つた。その爲に幾分か時間がかかつたけれども、私は決して退屈はしなかつた。いや退屈どころではない、私は私たちの小舟を遅れさせて、水の上の夕暮を見せてくれたあの日の、あのそよふく逆風に感謝しなければならぬやうに思ふ。それ程その日の鷺江の夕暮は美しく楽しいものであつた。私はその夕方以來、支那の沿海地方では鷺江の風光が第一だといふ定評や、西湖もこれには及ばないといつた人の言を信ずるやうになつた。西湖も他の地方をも知らない私ではあるが。

眞實私は、あの日の夕方ほど自分の趣味にしつくり合つ

た自然を、その前にもその後にも、まだ一度も見えたことはな
し。

水路を半分も来て、幾つもの小島が見え出す處に來た頃
には、夕日は目に見えながらゆるゆると西に暮き傾いた。西
方の山山には、かすかな夕雲が煙のやうに消えて行くところ
であつた。羅を脱ぎ去つたこの幾重にも連つた山山や、複
雑に突入した鷺江の岸べの高低が、入日の光に濃い影を荷
葉皴に刻んだが、やがて濃淡さまざまに、紫や藍や紺青や黄
や赤金や、説き盡し難い色に幾重にも霞みながら、しかもそ
れは刻々に、物憂く氣まぐれな氣分のやうに捕捉しがたく
變化した。——日脚が靜に移つて行くがままに。

荷葉皴
南宋派の書法
にして、山の
皴を描く一種
の筆法。

我我の舟がまだ掻き亂さない水の行手には、金が溶けて
流れた。水の上の金色が紅く變る頃には、山山はその裾の方
からごく少しづつ灰色になり、さて暗くなつて行く。日は落
ちたが、餘映は虹の紅い部分のやうな茜で空に残つてゐる。
それもやがて薄れる。どういふ大氣の理由であるか、その夕
映が赤い天の川のやうに一筋に、入日のあつた山の頂から
遠く東へ流れてゐる。その夕映の消える處を尋ねて東の方
を振り返ると、そこには低い山の僅に寸ばかり上に、かすか
に淡い満月が大きくふわりと漂うて居るでないか。そのつ
つましやかさに忘れられて居た月は、刻々に白さを増して
來た。まだ光とはいへない白さである。その光のない月の下、

その我我の舟に近い山裾の干潮したあたりに、一羽の白鷺が立つてゐる。この脊の高い多少の神韻を帯びた鳥を白く浮き出させて、ほのかな夕闇は追つてゐる。白鷺はうなだれて佇んでゐたが、まだ黒く濡れて見える磯の上を、何か喙むと、さて軽く飛び立つて、我我の小舟の上を稍高く、しかしその羽音をけはひに感じさせて横切つたが、すぐ空に消え去つた。濱にはただ加葦といふ灌木が黒く這つて居る。この磯に沿うて牡蠣を養殖する爲とかで、細長い切石が無數に並べられてあるのが、廢址か何かのやうに佻しい。月の白さは靜に光になつて來た。

「や、見給へ。」

鄭君
廈門生まれの
青年の名。

案内役の鄭君が船のゆく手を指す。一間程の黒いものが、ただほのかに明るい水の面に、ぼつかり小舟の底のやうな形に浮くと見れば沈み、沈んで浮き、三度浮いてさて見えなくなつた。

「見たか。」

「見た。何だらう、あれは。」

「神魚——白鰐。鄭は私の懷中記事冊へ大きく書きながら、かう讀んだ。白鰐は普通十呎以上ある。鷺江の到る處にあのやうに形を見せるが、舟が近づけばどんな小舟にでも必ず姿を潜めて、古來一度も舟を害つたことはない。それゆゑ人人は神魚と呼んで、感謝し尊敬してゐる」と鄭はいつた。そんな説

明は今どうでもいい。靜に見給へ、月は段段眞珠の光になつて來た。月光のまづ浮んだのは、遠い西の岸の小暗い山かげの小波の上であつた。さうして私の心は、譬へば月の光と共に匂ひ出すといふ月來香の花のやうに、夕月と、夕月の統治する四邊の風景とに魅了された。水上の薄暮は徐に迫つて、薄暗がりの中で、すべては哀婉で、幽雅で、更に孤獨な白鷺や、古怪な神魚によつて一味の凄異を脈搏たせながら、限なく深い詩情のなかに暮れ惱んでゐる。しかもどんな勝れた詩人の詩も、どんな作家の美しい物語も、情趣の隈なき密度に於いて、微妙な推移の効果に於いて、今日の鷺江の夕暮の情趣にどうして及ばうか。

ターナー
英國の風景
畫家。西曆
一七七五年
—一八五一
年。

ジャンク
Junk

佐藤春夫
文學者。明治
二十五年生ま
る。和歌山縣
新宮町の人。
慶應義塾大學
に學ぶ。

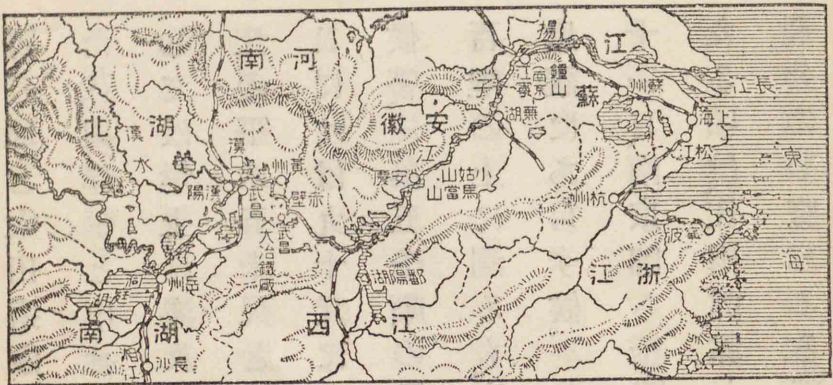
廈門市街の一角が灰色に見えて來た。然し其處にともさ
れた街の灯は、まだ暮れ切らない大氣の中に空しくぼやけ
てゐる。これはターナーの構圖である。西岸の山蔭に浮んだ
月光は、今はくつきりと豊かな銀箔になつて來た。どこからの
歸帆であらうか、西の方から私たちの路を遠く横ぎつて、厦
門の舟著場の方へ急ぐ舢舨がある。私たちの舟人は帆を卷
いて漕ぎ出した。幾艘かのジャンクの下を抜けると、厦門の
市街の灯がもうかがやかしく水に映り初めて、月影は今か
ら冷く降り灑がうと用意してゐる。(佐藤春夫—南方紀行)

二七 長江湖航

長江
支那第一の大
河揚子江をい
ふ。

七月九日の夜といはんか、十日の曉といはんか、わが船はすでに長江の本流に入り候ひぬ。江といはんか、海といはんか、極目際なく、唯茫茫として月影の水心に涌くあるのみに候。
快眠一覺後、甲板に出づれば、兩岸の風色、わが精銳なる雙眼鏡の力によりて仔細に辨ぜられ候。叢生したる蘆葦は定めて北清の高梁とその長を競ふべく、柳蔭の民舎は概ねその蘆葦を以て葺けるやうに見え候。水邊に眠る水牛、水草の中に魚をあさる漁夫、河童の如く堤外の小流に出没する兒童、往來織るがごとき小帆大帆、悉く指顧の間にこれあり候。

夕立の空より
云云
初二句は「露
おかぬかたも
ありけり」。



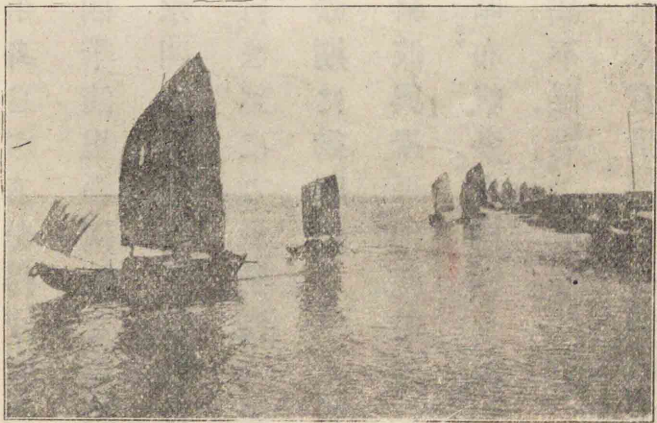
長江地圖

眞に長江の大には何といひても低頭平身せざるを得ず候。この邊は四十清里の河幅なる由、即今、増水四十尺以上と承り及び候へば、まさにこれ長江の最大膨脹の期に御座候。
渺渺^{スル}奔波與岸平、半江雷雨
半江晴、布帆多在柳梢上、掠^ス
水沙禽不識^ラ名^ナ。
これは全く實景にて一字の虚構なく、夕立の空より廣き武藏

漢江
陝西省に發し、漢口に至りて揚子江に合す。

金陵
江蘇省江寧府。
王荊公
名は安石。宋の政治家、文學者。(西曆一〇二一年—一〇八六年)

野の原と太田道灌が詠ぜし句、今更思ひ出され申し候。ただ「與岸平」と申せども、時としては岸上に溢れ申し候。漢江の平水五十尺と申せば、今日にては九十尺になり居り候筈、一萬五千噸の戰艦が六百哩の上に溯るも、決して不思議にあらず候。十一日、南京即ち金陵に著したる頃は、江雨霏霏として、王荊公の夢寐忘るる能はざりし鍾山は、江雲模糊の裏に



江 長

蕪湖
安徽省太平府に屬す。長江の右岸。
水滸傳
有名なる小説。元の施耐庵の撰。

陸龜蒙
唐の文人。字は魯望、江湖散人と號す。

なかば封ぜられ候。蕪湖に至れば大雨盆を傾くるが如くにて候。所在なければ船中備附の水滸傳を讀みて閑を消し候。今更の如く、水滸傳が支那人の思想及び生活を敘するにおいて要領を得、肯綮に中りたるを感歎致し候。

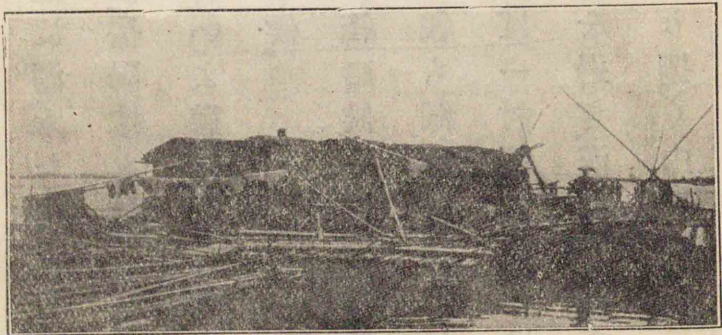
十二日はこの航行中最も獲物多き日にて候。唐宋詩人の好題目の一たりし小姑山は、縦令増水の爲に平生よりも深くその腰骨を洪濤に没したりとも、尙滾滾たる長江の砥柱としてその中心に屹立致しをり候。陸龜蒙が天下の險と稱せし馬當山は、球磨川の槍倒を大仕掛にしたるものにして、江流廻環、小渦、大渦、大大渦、その下

大冶鐵山
湖北省武昌の
東南にあり。
漢口
湖北省漢陽府
に屬す。
武昌
湖北省の首
府。
漢陽
湖北省。
長沙
湖南省の首
府。洞庭湖よ
り浙江を溯る
六十里の左岸
にあり。

に千轉萬合しつつある、人をして毛髪を豎てしめ候。
十三日は大冶の鐵山を遙見し、薄暮漢口に著し候。漢口
は武昌府と江を隔てて相對し、恰も馬關と門司との如
く、更に漢水の來會する頭に漢陽ありて、鼎立の姿をな
し、洵に南支の雄鎮に候。著船と同時に湖南汽船會社の
木幡氏來船し、同夜直に同社の湘南丸が、長沙に向けて
發航するにつき同行すべきやとの誘引あり。一議に及
ばず、渡に舟の心地にて直に乗り移り申し候。
十四日、目覺むれば身は湘南丸の上において、漢口上流
の揚子江を溯りつつあり。この邊、江口より六百餘哩の
上なれども、江の幅はなほ一哩以上或は二哩にも及ぶ

べく、江水は依然森茫たり。江岸には隨處に水牛群をな
し、兒童の水牛を驅使するや、狗兒
を扱ふよりも容易なるが如し。耕
作には固よりこれを使用致しを
り候。その江畔の柳蔭に、兒童が牛
背に腰をかけて悠然たるさまは、
宛然一幅の畫に候。而して増水の
痕は隨處にあり、根こぎの柳樹な
ど到る處に倒れをり候。
十五日、起きて江水を見れば、既に
碧に澄み候。船は洞庭湖に入りたるにて候。九日以來、赤

洞庭湖
湖南省の北部
にある大湖。



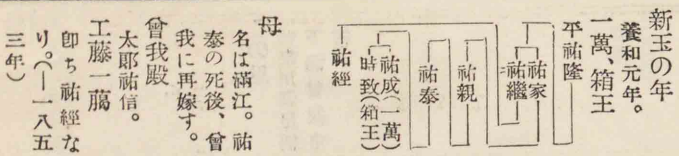
長江の筏

岳陽樓
岳州城西の門
樓なり。
君山
洞庭湖中の小
島。
湘江
陝西省に發
し、洞庭湖に
注ぐ。

味噌汁のごとき江水の中に生活したるこの身に取り
ては、いかにも嬉しく覺えられ候。直に湖水を汲みてこ
れに浴し、心身爽快に相成り申し候。岳陽樓も過ぎ、君山
も過ぎ、須臾に湘江に入れば、碧いよいよ碧に、流も漸く
縮りて、はじめて河らしく感じ申し候。
申すまでもなく洞庭湖の見物は、大筏に候。一箇の筏の
上には十數軒の家ありて、豚も飼ひ、鶏も飼ひ候。時とし
ては野菜畑さへこれあり、遠く望めば一村落の如くに
候。さなり、一村落が筏となりて洞庭を過ぎ、漢口を経て
蕪湖に達し、其處にて豚、鶏等、悉皆賣り捌く由に候。

(徳富蘇峯—七十八日遊記)

二八 空ゆく雁



新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりに
ける。ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にてたはぶれながら、いか
に母御前、父はいづこにおはしますぞや、その佛は何國にま
しますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前いざさせ給へ」と
いひければ、遙に忘れたるこし方も、今更思ひ出されて、消え
入るばかりに思はれて、母泣く泣く宣ひけるは、あの曾我殿
こそ、おのれ等が父にてあれと心強くかたらひけれども、涙
に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、
「父御前はまことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤

この里
神奈川縣足柄
下郡曾我中
村。

とやらむに射られ死に給ひぬ」と兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さむとや思ふらむ。我等がこの里に在りと知らずや過ぐらむなどおとなしく語りければ、母よりはじめて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びあたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ箱王殿。空を飛ぶつばさも皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにて

河津殿
祐泰。

人もこそ聞
け

ぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。我等は人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜り、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。我等より幼き者にて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありきことの羨しさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや」とて、袖に顔をさし入れてさめざめと泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房これを聞きて、あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤達、夜も更けぬるに、さやうにて

はおはするぞ。とくどく入らせ給へ」と怖しげにいひければ、

二人のものは門外へ逃げ出て、思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りにつけり。

或時兄弟は、竹の小弓に薄矧うすきりの小矢を取り添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立ち向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山



丹緑木本活版會我物語挿繪

にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさしあひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能あたにあるなるぞ」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかたと人人思ひけり。

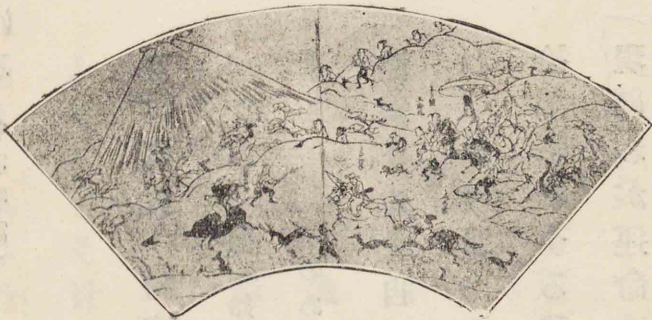
一萬が乳母この由を聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子どもを呼び寄せ、泣く泣く語られけるは、實か、おのれ等がさも怖しき謀叛を起さむと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松川が淵に沈め奉りし故に、御敵とあつて、先年伊東の

伊東入道
祐親。(一八
四〇年)
千鶴御前
母は祐親の
女。
松川が淵
静岡県田方郡
伊東にあり。

石橋山の戦
 治承四年八月
 なり。石橋山
 は、神奈川縣
 足柄下郡にあ
 り。
 土肥の杉山
 同郡土肥の山
 谷、石橋山の
 南にあり。
 梶原景時
 (一八六〇
 年)

館において失はれ給ひぬ。おのれ等かかる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時千度百度悲むともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとどまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の合戦に打ち負けて土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人、心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返しまゐらせ、二人の幼き者どもを助けて給らむと申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今まで希有の命を保ちたるぞ。それに就きて、曾我殿の芳恩をば生生

況や—おいて
 をや



富士の巻狩 (松屋棟梁集)

世世にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るところそ

聞け。況や汝等人倫においてをや。然るを却つて曾我殿に歎を與へむこと、返す返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速に謀叛をとどむべし」と口説きたてて誠められければ、二人の子どもも目と目とを見あはせ、顔うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところに、ては内内談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も内内怖しき者どもの心さま

せむとぞ
思はれける

かなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれける。(會我物語)

二九 路傍に寝てゐる青年

(劇の始る前に老翁に扮した役者が出て、左の開場詞を多少調子のある言葉で述べる。)

浩繁なる大自然の書の、
わづか一二ページをのみ
拾ひ読みする我等人間は、
現に、わが運命に影響して、
遂にその最後の歸趨をも決する

幾多の重大なる出來事をさへも、
大抵は只不完全に意識し得るに過ぎず。
いはんや有形又は無形の、何等の結果をも
われらが身の上に齎さずして去れる出來事をや。
それらは、如何に我が身近にて起るとも、
われらが意識の鏡には、
いささかの影をだにうつさて過ぎ行く。
あはれ！
かくてこそ世はなかなか
過ぎよかりけれ！
若しもあらゆる小き出來事が、

夢にはた現に、
事ごと時に時ごとに
われらが意識を動さば、
人の世はあまりに空望多く、
またあまりに杞憂多く、
束の間も静ごころあらじ。
このことわりを
ここに眠れる青年の上に見られよ。

場所、戶外。時、夏午後三時過。

上手に森、その前の方に特に大きな楓の木が一本、四方に枝を張り、稍小高くふくよかに盛り上つてゐる芝地を掩うて、天然の四阿を形造つてゐる。その根方に、多少の人工の加つた清水井戸があり、水がいかにも涼しげにぶくぶくと吹き出してをり、そこには可憐な夏草がいろいろ咲き亂れてゐる。上手の奥から下手へ掛け里道、里道の向は田圃、田圃の向は遠山。楓の根方に、大學生らしい一人の青年、登山旅行中であるらしい服装だが、チョッキの胸をだらしなく開けてゐるので、胸巻が細袴の端からはみ出してゐるのが見える。風呂敷包と振分の小鞆を枕にして、如何にも心地よささうに眠つてゐる。白いきれの附いた帽子と蝙蝠傘が、すぐ傍に投げ出してある。

開場詞が済むと、汽笛の聲が聞え、やや遠くで汽車の走る音がする。やがて一しきり、色色の人物が里道を通つて行く。旅商人、野らへ通ふ村の女、自轉車に乗つた地方の會社員らしい男など、往來が一寸とぎれると、土地の商家の女主人らしい老女と、小僧ではない小店員らしい少年とが通る。

少年は忽ち眠つてゐる青年を見附ける。

少 「やあ！ あんなどここに！ おかみさん、御覽なさい。あんなどここに學生さんが寝てますよ。……どうだ！ 軒をかいてら。

暢氣だなあ！」。

女主「ほんとにね！いい心持さうだねえ。きつと早立か何かで恐しく草臥れなすつたんだよ。罪のない顔をしてよく寝てゐなさること！まるで赤さんのやうだねえ。」

少「やあ！鼻の穴へ蟻が這ひ込みさうにしてら。面白いなあ。手傳つて追ひ込んでやらうか？」

女主「およしよ、およしよ。悪戯おしてない。ささ、おいでよ。おいでといへば……（青年に向つて）靜にお休みなさい。さよなら。」

少年を促して女主は通り過ぎる。と行き違ひに下手から禁酒會の講師 A 洋装にて、近郷の有志者らしい B C 二人と、何か話しながら通りかかる。ふと青年を見つけて、

A 「あ、あれを御覽なさい。今の青年はあれだから困る。大概

のわるい事はアルコールに原因するんですが、就中怠惰と放逸とは酒がもとです。たしかに昨夜飲み過ぎたんですな。あの年齢の者が眞晝間からああいふ爲體では、我が國の前途が憂慮に堪へなくなりますよ。宿酔でせう。」

B 「旅行中の學生らしいですから、二日酔ぢやございませんまし。」

A 「さうや、二日酔です。あの顔の蒼白いのを御覽なさい。旅の恥は掻捨」なぞといふわるい諺があるから困る。存外柔和な顔をしてゐますが、かういふわるい癖があつちやあ、お袋が氣の毒です。甘やかし過ぎたんですな。困つたもんだ。しかしちやうど今日の講話のいい一つ材料です。」

と手帳を出して何か二三行書き留めつつ、B Cと共に通り過ぎる。
郵便脚夫が通る。

暫して、品格のよい豪商らしい五十六七の男と、その妻女らしい四十三
四の女と、何か話しながら徐に上手から出る。

豪商「どうしてハンクしたかねえ。中中暑い。乗つてゐると自
動車が風を切るから、さ程にも思はないが、かうして降り
て歩いて見ると中中暑いねえ。(と汗をふきながら)お！あそ
こにいい清水が出てゐる。あの木の蔭へ往つて少し休ん
でゐよう。(青年を見つけて)おや！(と妻女を見返つて)御覽、あれを。
いい心持さうに寝てゐる」。

妻「まあ！學生です。ね。ほんとにね、氣持がよささうに」。

豪「おいおい……起しちや氣の毒だ。そつとこつちの方から

おいで。そつと、そつと」。

二人は拔足して楓の一方の根がたへ腰を掛ける。清水を手に掬んで嗽
をしたり、ハンケチを浸したりする。豪商は青年をつくづく見やつて、

豪「如何にも安樂さうだ。えらい軒をかいて寝てゐる。眠藥
の力なんか借りないで以て、ああいふ風に眠られるやう
だと嘸愉快だらう。ああいふ境界が金で買へるものなら、
おれの財産を半分やつてもいいくらいのもんだ。(と溜息
して) 四時間と安眠の出来る夜が、月に何度あるだらう。羨
しいことだ」。

妻「丈夫なんです。ねえ、全く」。

豪「丈夫なばかりぢやない。氣苦勞がないからだ。心にわだ
かまりがないからだ」。

妻 「いいえ、年が若いからですよ。つまり丈夫でさうして氣苦勞がなくつたつても、わたし達のやうな年になると、もうとてもああいふ風には眠られませんよ。おや日光があつて來た」。

と青年の顔へ日光がさすのを見て、垂れた楓の枝を組み合はせて、それを遮るやうにしてやりながら、尙顔をつくづくながめて、

妻 「これはあなた、と聲をひそめてどこかの大學生です。品のいい顔をしてゐますよ。……ねえ、どことなく秀に似てゐるぢやありませんか。頤から頬へかけて、……額のはえ際の具合なんかそっくりですよ。若しや大神宮様のお引合せではないでせうか？」

豪 「え、何が？」。

妻 「かうして思ひがけなく、ここでこの學生に逢ふといふのは、と少し涙聲になつて）ああして一粒種の秀二郎には先立たれますし、せめてもの頼にしてゐた従弟はあの始末でせう。勿論わたくしはとりに諦めてはゐます。諦めてはゐますけれど……でもねえ、成らうことなら……」。

學生は何かむにやむにやと寢言をいつて寢返をする。

妻 「おや！目を醒すかも知れませんか。ほんとに善良さうな顔をしてますわ。いつそ起して見ませうか」。

豪 「とめて、何の爲に？」。

妻 「でも、秀に似てゐるぢやないの？」。

豪 「おいおい！輕卒な事をしちやいけません。どういふ性

質の人間だか分るものか。

妻 「だつて無邪氣さうな顔をしてますもの。ねえ、とにかく一寸起して話をして見ようぢやありませんか。」

豪 「おいおい、本氣かい、お前さん。馬鹿な事をおいひてない、どこの者だか分りもしないのに。」

妻 「ですから起して聞いて見ませうよ。」

豪 「いいや、およしなさい。つまらん係合になるまいものでもないから。」

妻 「でもわたし……。」

その途端自動車の運轉手らしい男出る。

運 「へい、お待遠さまでございました。もう直りましてござ

います。お召し下さいまし。」

豪 「もう大丈夫かい。」

運 「へい、もう大丈夫でございます。」

豪商は妻を促して歩み出す。運轉手つづく。妻女は残り惜しさうに、青年の方を見返り見返りついて入る。

暫く人足が絶える。

日がだんだん傾くらしい。

森の奥から人相のわるい男DとEと二人が出て来る。

D (青年に目を附けて、小聲で)「おいおい！まんざらぢやないぜ、

あの胴卷を見な。」

E 「なるほど(四邊を見て、上下を見て)やるかな？。だが、もうよつほど寝たらしい顔してるから、起きるかも知れんぜ。」

D 「なあに！起きたらやつちまふんだ。譯はねえ」と腰の手拭をしごいて縊る眞似をして見せて「これだ」。

E 「うなづいて、よし」。

二人は目くばせして青年に近寄り、まづその細袴の端からはみ出してゐる胴巻に手を掛けて、そつとそれを解かうとする。

この途端に、下手で荷車の掛聲が聞える。D Eは下手を見て舌打をして手をとどめ、一寸青年の傍を離れて清水を掬んで飲んだり何かしてゐる程なく、荷車を挽いて車力が二人下手から出で、車をとどめ、同じく木蔭へ来て清水を掬ふ。DとEは顔を見合はせ、「まいましい」といふ思入をして下手へと去る。

やがて車力二人も車を挽いて去る。

と、青年はふと目を醒す。やうやく起き上つて、目をこすりこすり大欠伸をしたが、日かげを見て驚いた體。

青年 「おやおや！大變寢たらしいぞ。（と時計を見て）おや！もう

五時だ。」

と大急で身づくろひして、鞆と風呂敷包とを振分にして、肩にして立ち去り、上手森のうしろへ稍足早に入る。

と近い處で村寺の鐘。

（開場詞を朗讀した老翁が又出て、次の閉場詞を讀む。）

あはれ、今去りし青年！

その命の流の上に、

大いなる富のまぼろしが、

黄金色の光を投げしを知らず、

またおそろしき死のまぼろしが、

その命の流を

血汐に染め成さんとせしをも知らず、

いとも心安げに二時三時を眠りつ。
 ああ、かくてこそ世は住みよかり、
 知らざればこそ住みよかり。
 かかることは、現の間にもいとさはにあり。
 あはれ、かくてこそ世は住みよかりけれ。

(讀み了りて入る。)

(坪内逍遙「わがペーシエント劇」)

中等國語讀本 新修二版卷五終

啄木 歌集

- 【新理想主義】
- 【新現實主義】
- 【社會問題】
- 【民衆文藝】
- 【翻譯文學】
- 【新詩、童話】

内

生田 春月
 尾崎 喜八
 白鳥 省吾

三

齋藤 茂吉
 島木 赤彦
 古泉 千樫
 太田 水穂
 尾山 篤二郎

坪

森

鷗外 小宮 實篤
 有島 武郎
 長與 善郎
 志賀 直哉
 里見 弴
 菊池 寛
 芥川 龍之介
 谷崎 精二
 久米 正雄
 小川 未明
 江口 渙

二五八〇

大

二〇

二五六六

正

一四

